

# 『しのびね物語』

注釈(5)

岩 坪 健

Annotations to the Tale of Shinobine

Takeshi IWATSUBO

〔要 旨〕 いまだ注釈書が出版されていない『しのびね物語』（中世に改作された擬古物語）の注釈。特に

源氏物語の影響を指摘する。

〔キーワード〕 しのびね物語、源氏物語の影響

凡 例（同前）

一、今回は底本（全七十丁）の第五十六～七十丁を翻刻して、注釈を付けた。

## 五十八

その夜は、御方<sup>1</sup>「かた」に伏「ふ」し給ひて、夜深く<sup>2</sup>起き給ひ、隨身「ずいじん」の光家「みついいへ」召して、「ちと人に忍びて、物<sup>3</sup>へ詣「まう」づる事あり。ゆめゆめ隠して出「い」で立て」<sup>4</sup>とのたまへば、御馬に鞍「くら」置きなどして、待ち奉る。今ひとたび若君の見まほしければ、おはして、御乳母<sup>5</sup>「めのと」起こし給ふ。「など、かく夜深くは<sup>6</sup>」と申せば、「ちと、物<sup>7</sup>へ詣「まう」づる。久しく見るまじければ」<sup>8</sup>とて、御声のうちわななくに胸うち騒ぎて、「北<sup>9</sup>の方<sup>10</sup>「かた」へ、告「つ」げ奉らん」<sup>11</sup>とて、あなたへ参れば、引きとどめて、「よし、ことごとしく、な聞こえそ。やがてやがて、七日ばかりの旅ぞ」<sup>12</sup>とのたまへば、大殿油「おほとなぶら」明「あ」かくかかげて、見せ奉る。若君、なに心なく寝入り給へるを、かき抱「いだ」きて、「吾子「あこ」よ。まろが参りたるぞ。目開<sup>13</sup>「あ」きて見たまへ」<sup>14</sup>とあれば、「殿のおはしたるか。母君は」<sup>15</sup>とて、御目は開「あ」かずながら、御手「て」をさし上げて抱「いだ」かれ給ふ。御髪「みぐし」は目刺<sup>16</sup>「めぎ」しに生「お」ひて、色はあくまで白く、つぶつぶと肥えて、美しき目見<sup>17</sup>「まみ」のほど、母君<sup>18</sup>によく似給へり。『今ならでは、いつの世にか、また見るべき』とおぼせば、なかなか、かきくらす心地「こころ」の堪へがたければ、乳母「めのと」の方「かた」へ譲り給ひて、「物より帰らんほどは、目「め」放「はな」たで、いとほしくせよ」<sup>19</sup>とて、出「い」でたまふ。

1 中納言が自室で寝たのは、夜中に人目につかず抜け出せるため。 2 「夜深く」の箇所、筑波大学本（第一系統）と同じ。第二・三系統は「あかつきに夜深く」。 3 数時間後、共に出家する光家にさえ、物詣でと嘘をつくほど用心深い。結局、出奔を告げたのは姫君のみ「五十六①」。 4 若君に会いに行くと、家出がばれる恐れがあるにもか

かわらず、自制できないほど、親子の情は断ちがたい。「五十一18」参照。5 子供は普通、乳母と一緒に寝る。参

考「若君（薫）は、乳母のもとに寝たまへりける」（横笛、三三七頁）。6 夜中の訪問は異状。参考「殿（藤原道長）

の、夜中にも暁にも参りたまひつつ、御乳母のふところを（若宮を）ひき探させたまふに、（乳母が）うちとけて寝  
たるときなどは、何心もなくおぼはれて驚くも、いといとほしく見ゆ。」（『紫式部日記』一八七頁）。7 「ちと」の

箇所、筑波大学本は「しばし」。「しばし」は源氏物語などに多用。「ちと」は中世語か「三⑥14」。8 帝には「鞍馬  
の方へ」「五十五10」と、具体的に場所を告げた。9 夜中の訪問にも、また震え声にも、異状な気配を感じた。

10 参考「秋の末つ方、四季にあててしたまふ御念仏を（中略）かの阿闍梨の住む寺の堂に移ろひたまひて、七日のほ  
ど行ひたまふ。」（橋姫、一二七頁）。11 「かかげて」は古風、「かきあげて」は今風な表現。「二④5」参照。12

愛児の寝顔を見るだけでは、物足りない。参考「若宮は、おどろきたまへりや。時の間も恋しきわざなりけり。」（孫  
を見にきた光源氏のセリフ。若菜上、一一六頁）。13 頭注「との、按「との」は「てゝ」の誤なるへし」。この注

を付けた古人は、「殿」では内大臣を指すと考えたのであろう。確かに内大臣は「殿」「六十」、または「大殿」「六十。  
六十五」と呼ばれている。しかし「母君は」のセリフが続くことから、内大臣が嫌っている母君と同行するはずがな  
いことぐらい、若君も知っている。「二十八①12」、この「殿」は「七②9」のように中納言を指すと見てよい。

参考「父「てて」のおはしたり。母君は。」（若君のセリフ。「十八③6の前」）。14 若君は父親に、「母君は、いづく

へおはしけるぞ。」「四十一14」と尋ねたこともあり、父が母を連れてきたかと、寝ぼけて勘違いした。15 若君、四

歳。元服前は少女のように髪を伸ばす。参考「目ざしなる御髪「みぐし」を切「せち」にかきやりつつ、遊び睦れ給  
ふ。」（日本古典全書『狭衣物語』三、一六頁）。16 参考「白くそびやかに」（二歳の薫。横笛、三三七頁）。「いみじ

う白う光りうつくし」（同、三五二頁）。17 「つぶつぶと肥えて白ううつくし」（五十日の薫。柏木、三二二頁）。

「つぶつぶと清らなり」（二歳の薫。横笛、三五二頁）。18 参考「（薫の）まみ、のびらかに恥づかしう、かをりたる

などは、なほいとよく（柏木に）思ひいでるれど」（横笛、三三七頁）。

19 母親似は前出「四十一16」。

## 五十九

①かたがた思ひ乱れて、御馬に乗り給ふに、『いづくへ行くぞ』と、夢路<sup>2</sup>「ゆめぢ」に迷「まど」ふ心地「こちち」して、横川<sup>3</sup>「よかは」といふ所におはし着きたり。かねてより聖「ひじり」に、「かく出家の心ざし」とこそ、のたまはねども、「参りて、法文<sup>6</sup>「ほふもん」の次第<sup>7</sup>「しだい」をも承らん」と、のたまひ置きし事なれば、『さうこそ』と思ひ、入れ奉るに、いみじく心細<sup>9</sup>げにて、出家の由「よし」をのたまへば、聖<sup>10</sup>、大きに驚き、「大殿<sup>父上</sup>「おほいどの」の御心に違「たが」ひまるらせて、いかがし侍らん。その上、かく惜<sup>11</sup>「あたら」しき御身を、今やつし捨てさせ給はずとも、御心にてこそ侍らめ」とて、「いかにも、えやつし奉るまじき」と申せば、<sup>中納言</sup>「大殿の、何事「なにごと」にか御身のために、煩ひをば、かけ給ふべき。いと、さる事ありとも、自「みづか」ら身にかへて申しあきらめん。ただ、かりそめに思ひ初<sup>15</sup>「そ」めつる事にも侍らず。年月「としつき」の事なれば、ゆめゆめ制し給ふとも、甲斐<sup>16</sup>「かひ」あるまじ」とのたまへば、逃<sup>17</sup>「のが」るべくもあらず、力及ばで、御髪「みぐし」を剃<sup>18</sup>「そ」り奉る。「流転<sup>16</sup>「るてん」三界「さんがい」と三度<sup>17</sup>「さんど」、礼<sup>19</sup>「らい」し給へば、さすがに涙の先立ちて、目も見え給はず。ただ姫君の慕<sup>19</sup>ひ給ひし面影「おもかげ」、若君<sup>20</sup>のことと思し出<sup>21</sup>「い」づるに、心弱く、ただ落ちに涙の降り落つれば、『聖<sup>22</sup>のさばかり思ひ澄ましたる心に、いかが思はむ』と思ひ返して、戒<sup>21</sup>「かい」を保ち給ふ。

1 参考「いづちへ行くとも、おぼえ給はず」「姫君との別れ。五十六②18」。

2 参考「いづくへ行くらんと、夢路に

迷ふ心地して」「左大将家へ婿入り。二十一②15」。「紫の上の葬儀に」御送りの女房は、まして夢路にまどふ心地し

て」(御法、四九七頁)。 3 横川で出家した若い公達といえ、藤原高光(多武峰少将入道)が有名。物語では『しぐれ』が、この場面に似通う。両作品とも二十代の主人公が、家来を一人だけ伴い横川へ赴き、知り合いの聖に一度は反対されながらも、結局、家来と共に出家する。「六位の進とたゞ二人、比叡の山に登り、東塔東谷、横川とゆふ所へおはしつゝ、年久しく知り給へる聖のもとにて「出家せん」との給へば、聖、大に驚きて、「都へかくと申候はでは叶ふまじき」と申せば」(新大系『室町物語集 下』五〇頁)。 4 底本「のたまねども」。諸本により改める。 5 聖とは、「本来は高德の僧であるが、この時代は本寺から離れて草庵などを構え、修行に専念する念仏行者の称。」(若紫、二七四頁の頭注)であり、都へは出てこない、貴人が横川まで出向いても不自然ではない。 6 当時の貴公子は法文に関心が深かったので、それを口実にすると怪しまれない。参考「法文など読み、行ひせむと思して、(雲林院に)一三日おはする」(賢木、一〇八頁)。「(薫の君は)法文などの心得まほしき心ざしなん、いはけなかりし齡「よはひ」より深く思ひながら」(橋姫、一二三頁)。 7 「法門の次第」と解した。あるいは「四諦」か。(広島平安文学研究会の注)。 8 あらかじめ出家の意志を伝えておくと、聖が内大臣に通報する恐れがある。かといって来訪を事前に告げておかないと、聖が留守の場合、追いかけてきた家来に出家を阻止されるので、嘘をついた。 9 出家を潔く決心したのではなく、まだ俗世に未練を残している様子が、「いみじく心細げ」や、「心弱く」(本章①21)、「心汚く」(本章②16)に表れている。 10 聖とはいえ、大殿の怒りを恐れるのは、俗人と同じ。薫の女性(浮舟)を自分が出家させたと知った横川の僧都も、「胸つぶれて」、「過ちしたる心地して、罪深ければ」(夢浮橋、三六一、三六四頁)と自省した。「現在の権力者の一言にそむいてはどのようなことになるか。世捨て人も知っている。いな世捨て人ゆえ知っている。」(玉上琢彌氏『源氏物語評釈』薄雲、二〇〇頁)。 11 光源氏も女三の宮(時に二十二、三歳)の出家を、「いとあたらしう、あはれに」思った(柏木、二九二頁)。 12 時に中納言、二十七歳。若年の道心は、一生保持できるとは限らない。参考「行く末遠き人は、(出家しても)かへりて事の乱れあり、世の人に譏らるるや

うありぬべきことになん、なほ憚りぬべき。」(女三の宮に対する朱雀院の説教。柏木、二九五頁)。「まだいに行く先遠げなる御ほどに、いかでか、ひたみちにしかは(出家を)思したたむ。かへりて罪あることなり。」(浮舟に対する横川の僧都の諭し。手習、三三三頁)。<sup>13</sup>将来有望な貴公子の剃髪は、聖にも理解できない。参考「(薫は)年若く、世の中思ふにかなひ、何ごとも飽かぬことはあらじとおぼゆる身のほどに、さ、はた、後の世をさへたどり知りたまふらんがあり難さ。」(橋姫、一二三頁)。<sup>14</sup>頭注「いとさることありとも 按「いと」の二字、衍なるへし」。<sup>15</sup>光源氏も全盛期に、「なほ世を背きなん」と遁世を考え(絵合、三八二頁)、出家は「昔よりの御本意」であった(御法、四九七頁)。<sup>16</sup>頭注「刺髪文花含経云、流転三界中、恩愛不能断、棄恩入無為、真実報恩者」。<sup>17</sup>「流転三界中」など言ふにも、<sup>18</sup>断ち<sup>浮舟</sup>はててしものを』と思ひ出づるも、さすがなりけり。」(手習、三二七頁)。<sup>19</sup>「辞親偈(「流転三界中」)を、和上の唱詠に従って、三返唱詠する。(原漢文)」「(旧大系『源氏物語』柏木、四七六頁)。<sup>20</sup>「涙の先立つこと限りなし。」「四十五六」。<sup>21</sup>参考「そこはかと知りて行かねど先に立つ涙ぞ道のしるべなりける」(『更科日記』三一頁)。「涙しも先に立つこそあやしけれ背くたびにもあらぬ山路を」(新大系『とりかへばや物語』一五七頁)。<sup>22</sup>「慕ひ給へば」(五十六①23の後)。<sup>23</sup>殊更このときのことを振り返ったのは、「それが、最後の、実事ある逢瀬であったからである。」と加藤昌嘉氏は推察された(『しのびね物語』のコトバの網、「詞林」25所収、平成一年四月)。<sup>24</sup>「五十八4」参照。<sup>25</sup>「いみじく心細げ」(本章①9)と同様、後ろ髪を引かれる思い。<sup>26</sup>参考「(浮舟の生存を僧都から聞いた薫は)つつみもあへず涙ぐまれたまひぬるを、僧都の恥づかしげなるに、かくまで見ゆべきことかは、と思ひ返して、つれなくもてなしたまへど」(夢浮橋、三六四頁)。

②御戒「かい」の布施に御装束たてまつりて、藤の衣「ころも」・御袈裟「けさ」など、かねて用意し給へば、やがて奉る。昨日「きのふ」までは、色、綺羅「きら」を尽くし、花やかなる御袖<sup>3</sup>に今生「こんじゃう」の匂ひを薫「た」

き染「し」めて、行き過ぎ給へる後「あと」にも、翻「ひるがへ」し給ふ。立ち寄り給ふ所までは、玉鏡<sup>6</sup>を磨きて蔽  
「いつく」しかりし御様「さま」を、今日「けふ」はひき替へて、藤の衣「ころも」に麻<sup>7</sup>の袈裟「けさ」、あたりを見  
回「みまは」し給へば、柴<sup>8</sup>の編み戸に竹<sup>9</sup>の簀垣「すがき」、松風<sup>10</sup>・滝の音「おと」すさまじく、香<sup>11</sup>「かう」の煙「け  
ぶり」は薰衣香「くのえかう」の薰「かを」りにひき替へたる様「さま」は、世の理「ことわり」と言ひながら、こ  
とさら哀れさ、尽きせず。光家<sup>12</sup>も同じく剃「そ」り落として、藤の衣「ころも」に成りぬ。君<sup>13</sup>は、かばかり背「そむ」  
き給ひても、女君<sup>14</sup>の御面影<sup>15</sup>「おもかげ」身に添ひて、念仏<sup>16</sup>も心汚「きたな」く紛<sup>17</sup>「まぎ」るるぞ悲しき。

1 参考「御装束をば聖にたてまつりて、墨染めの麻の衣「ころも」をめしつゝ」（室町時代物語大成13『若草物語』  
五八一頁）。 2 姫君を嵯峨野から引き取ったとき、母君（尼君）用の衣裳も、乳母に用意させた「六3」。今回の僧

衣も別人が着る物として、乳母に依頼したのであろう。藤原顕信（道長の子）も、十九歳で突然遁世する直前、乳母  
に僧衣を頼んだ（『大鏡』道長上、三一一頁）。 3 参考「（玉鬘の元へ出かける鬚黒は）装束したまひて、小さき火取

とり寄せて、袖に引き入れてしめゐたまへり。（真木柱、三五六頁）。 4 参考「（光源氏が立ち去った後も）うちし  
めりたる御匂ひのとまりたる」（薄雲、四五三頁）。 5 頭注「ところまでは 按「は」は「も」の誤なるへし」。

6 参考「まいて玉鏡と磨かれたる百敷のうちにて」（『讃岐典侍日記』下、四四二頁）。「坊がねを一人「ひとり」にも  
あらず、二人「ふたり」まで玉をみがきて持給「もたま」へる。」（『宇津保物語』蔵開中、三八六頁）。「大人・童な  
ど、さきざきの御参りに異ならず、いみじう例の玉を磨かせ給ふ。」（『栄花物語』もとのしづく、三四頁）。 7 参考

「麻の御衣」（建礼門院の衣裳。大系『平家物語』灌頂卷、四三三頁）。 8 「柴の編み戸」の用例、勅撰集では二例  
のみ。いずれも隠遁者の住居。「ながめわびぬ柴の編み戸の明け方に山のは近く残る月影」（新古今集、雑上、一五二  
六、猷円）、「草のいほ柴の編み戸の住まひまで分かぬは月の光なりけり」（新後撰集、釈教歌、六二二、法印源為）。

「いにしへも夢になりにし事なれば柴の編み戸も久しからじな」(大系『平家物語』灌頂卷、四四二頁)。 9 参考  
「松の柱、竹の簀垣、石階」「いしはし」、さま変はりて、なかなかおもしろし。」(『源氏小鏡』須磨。ちなみに源氏物語では、「竹編める垣しわたして、石の階、松の柱」須磨、二〇五頁)。勅撰集では一例のみ。「山里の竹の簀垣し荒ければうち外もわかず有明の月」(金葉集<sup>二</sup>原本、冬、春宮大夫公実)。 10 松風も滝の音も、都より人氣が少ない山里の方が「すさまじく」聞こえる。参考「同じき山里といへど、さる方にて心とまりぬべく、のどやかなるもあるを、(八の宮邸は)いと荒ましき水の音、波の響きに、もの忘れうちし、夜など心とけて夢をだに見るべきほどもなげに、すぐく吹きはらひたり。」(橋姫、一二四頁)。 11 参考「蘭麝の匂ひにひきかへて、香の煙ぞ立ちのぼる。」(建礼門院の住まい。大系『平家物語』灌頂卷、四三三頁)。 12 乳母子や従者も、主人と共に出家するのが習わし。女三の宮が剃髪した際、御乳母や古女房など「十余人ばかり」を光源氏が選んで、一緒に出家させた(鈴虫、三六八頁)。 13 中納言を「君」と呼んだのは、出家後は官職がなくなるから。本作品にはこれ以外に「君」が七例あり、うち六例は忍音の君。あと一例「三②6の前」は男主人公を指すが、それはまだ身元を明かしていないから。 14 受戒のときも、「姫君の慕ひ給ひし面影」(本章①19)が浮かんだ。 15 参考「(須磨への)道すがら(紫上の)面影に、つと添ひて」(須磨、一七八頁)。 16 参考「仏も、なかなか心汚しと見たまひつべし。」(帚木、一四三頁)。「若君の御ことをなむ、六時の勤めにも、なほ心汚くうちませ侍りぬべき。」(松風、三九六頁)。「過ぎにし方の年ごろ、心汚く、六時の勤めにも、ただ御ことを心にかけて」(若菜上、一〇五頁)。 17 以前からの懸念「心の澄むことあらじ」(三十五③8)、「念仏も障りあるべき」(四十五27)―が的中した。



かくて京には、大殿「おほいどの」に、「中納言殿、今朝「けさ」物詣「ものまう」でとて出「い」で給ひしが、ただ隨身「ずいじん」一人、召し具「ぐ」させ給ふ」と聞こゆれば、『世の常の物詣「ものまう」でならば、何しにかく人をも連れ給はざらむ』と、思し騒ぎて、おはしまし所を、殿・母上御覧ずれば、御文二つあり。一つは「北の御方「かた」へ」とあり。一つは「承香殿「しょうきやうでん」の中納言の局「つぼね」へ」とぞ書き給へる。

開「あ」けて見給へば、<sup>文詞</sup>「さても今生「こんじゃう」にては、御目「め」にかかるべきことの侍るまじきこそ。残り多く侍れども、菩提「ぼだい」の岸に至りなば、後「のち」の世の闇をば晴るけ奉らん。夢「ゆめ」幻「まぼろし」の世の中に、罪深き事のみにて明かし暮らすも、かつは益「やく」なきことなり。それにつけては吾子「あこ」が事を、我なからん後「あと」に形見と思しめして、いとほしくし給へ。大人「おとな」<sup>12</sup>しくも成り侍らば、殿上「てんじゃう」せさせて、上の見参「げざん」に入「い」れ給へ。この文、内の承香殿「しょうきやうでん」の局「つぼね」へ付けさせおはしませ」など、細々「こまごま」と書かれたるを見給ふに、母上の御心のうち、なかなか譬「たと」へむ方「かた」なし。<sup>母上詞</sup>「今朝「けさ」は、これへおはしけるにや。などや、自「みづか」らには知らせざりしぞ」と、御声をたてて伏「ふ」し転「まろ」び給へば、殿も、「かかるべしと思はば、何しに思ひよるべき。いかにも世にあれかしと思ふによりてこそ、大将<sup>17</sup>の事も思ひ立ちしか。かく、いたづらに成すべき端「はし」とや思ひし。親<sup>18</sup>の思ふほどは、子はなかりけり」と、泣き給ふこと限りなし。

1 中納言クラスならば、家来は大勢つくのが普通。「隨身一人」だけは異状事態ゆえに、内大臣に報告した。

「隨身一人」だけでは、「人をも連れ」たことにはならない。光源氏が夕顔の宿を訪れたときも、惟光・隨身・童の三人だけだったで（夕顔、二二六頁）、廃院の下家司は、「御供に人も、さぶらはざりけり。不便「ふびん」なるわざかな。」（同、二三四頁）と言った。3 中納言が「姫君の御方への文」「五十七<sup>14</sup>」のほか、北の方にも手紙を書いたのは初出。母親は息子に同情していた「三十五<sup>②1</sup>」ので書き残した。父親宛がないのは、恨みがあり許せないから。4 内大臣夫妻は姫君が承香殿にいることを知らないの、ただの恋文と思っただろう。5 この中納言は、忍音の君の女房「四四<sup>③16</sup>」。宮中で手引きして、二人を再会させた「四五<sup>1</sup>」。女房宛にしたのは、面倒なことを起こしたくないから。光源氏も須磨から朧月夜に送った手紙を、その女房（中納言の君）宛の中に同封した（須磨、一八一頁）。6 参考「あしこに籠りなむ後、また人には見え知らるべきにもあらず」（入山した明石の入道の遺言状。若菜上、一〇四頁）。7 参考「観音深く頼むべし。弘誓「ぐせい」の海に船浮かべ、沈める衆生引き寄せて、菩提の岸まで漕ぎわたる。」（『梁塵秘抄』一五八番）。「娑婆「さば」の外「ほか」の岸に至りて、とくあひ見んと思せ。」明石の入道の遺言状。若菜上、一〇八頁）。8 「後の世の闇」の用例は、早くは花山院の和歌に見出せるが、「慈円に多く見られる表現であり、また歌語として定着し、頻用されるのも慈円あたりからである。」（中村友美氏『しのびね物語』の引歌、「詞林」25、平成十一年四月）。9 子供が出家して修行を積み極楽往生すれば、その両親も救われる。参考「誠の道に入りなば、遂には助け奉らむ」「五十七<sup>6</sup>」。10 参考「見るままに夢幻の世の中はししの果てこそ悲しかりけれ」（『栄花物語』著るはわびしと嘆く女房、三九七頁）。11 俗人が日常生活を営むことすら、仏教では罪深いこと。参考「なべての世を、思ひたまへ沈むに、罪もいかに深くはべらむ。」（早蕨、三四八頁）。ちなみに「（出家して見捨てた親に）もの思はせ奉らん事の罪深く」「五七<sup>5</sup>」の「罪」とは異なる。12 以前から、「大人しくもならば、殿も我が代りと思して、宮仕へに出だし立て給はんずらん。」「五十六<sup>①15</sup>」と考えていた。13 両親が中納言を最後に見たのは、昨日の朝「五十七<sup>4</sup>」。14 父親が息子に対して、「人をも連れ給はざらむ」「本章2」と尊敬語

「給ふ」を使用しているように、ここも「知らせ給はざりしぞ」と、敬語を付ける方が普通。気が動転して、付け忘れたか。 15 「伏しまろぶ」は源氏物語に四例あり、母を亡くした落葉の宮（夕霧、四二九頁）、浮舟に先立たれた母と乳母（蜻蛉、二〇一・二三二頁）、浮舟の出家を知った妹尼（手習、三三二頁）に使用。 16 「世にあれと思す」〔三十五②9〕。 17 大将の件の初出は、忍音を引き取る準備中のとき〔六9〕。ということは内大臣は、息子を忍音から引き離すために大将家との縁談を思いついたのではなく、もともと忍音とは関係なく、息子のために良縁を苦慮していたことになる。 18 父親の愚痴は、「世にあらせむと思へば、かく心憂きこそ。親の思ふばかり、子は思はざりけるよ。」〔三十五①11〕と同じ。参考「親の思ふ程にはなかりける。」（新大系本『しぐれ』三五頁。この例は箕浦尚美氏『しぐれ』考にて指摘。「詞林」25、平成二年四月）。「親は子を思うても、子は親を思はず」（『源氏肝要』明石の巻）。「親の思ふほど子は思はぬ、うらめしさよ。」（室町時代物語大成『狭衣』九〇頁）。「親の思ふほど子の思はぬこそ悲しけれ。」（室町時代物語大成『落窪』三八六頁）。「親の心を子、知らず」（大系『義経記』三五一頁）。

## 六十一

忍音上  
さて姫君は、「この暮『くれ』」とのたまへるを待ち給へども、見え給はず。『たばかり給ひてや』と、心うく思しめす所に、御文「ふみ」を持って参りたるに、急ぎ開「あ」けて見給へば、さまざまの事ども書き給ひて、

中納言  
「有明の月<sup>3</sup>は雲居に澄み果てよ我「われ」こそ山<sup>4</sup>の奥に入「い」るとも

同5  
思ひ入る深山「みやま」隠れの住まひにも形見<sup>6</sup>に連るる人のおもかげ<sup>8</sup>。

文詞  
うち捨て奉ること、いかに恨めしく思すらむ。されども、思ふ心<sup>9</sup>のあれば、つらしとも、な思し入「い」りそ。今は<sup>10</sup>ただ、帝の御心に違「たが」はで、さぶらひ給へ。いづくの野の末までも、引き具<sup>12</sup>「ぐ」し奉りてこそ、あらまほし

けれども、吾子<sup>13</sup>「あこ」が事を思ふ故「ゆゑ」ぞよ」と、涙にくれて、書き乱し給へり。<sup>14</sup>『さりとも』と待ち給ひつるに目も暗「く」れて、この御文「ふみ」を顔に押し当てて、うち伏して、そのまま起きも上がり給はず。『恨めしくも、捨て給へるものかな』とは思へど、『出<sup>18</sup>「い」で給ひし月影の、いつの世に、また見ることのあるべき』と思<sup>19</sup>されて、さらに人目も知らず、泣き沈み給へり。<sup>20</sup>

1 「この暮れを待ち給へ。」「五十六①24」。「暮れば、とく御迎へに参らむ。」「同①33」。「姫君、『誠に、この暮れには』と思して、待ち給ふ御心、はかなかりけり。」「同②18」。

2 昨夜も中納言の言動を、「あやしうて」「五十六①27」、「いと、あやし」「同30」と訝った。

3 以前も贈答歌で、姫君を月にたとえた「四十四③⑤」。

4 「いかなる山の奥までも引きこもりたく侍りしかども」「四十五7」。

5 参考「思ひいるみ山隠れの苔の袖数ならずとておかぬ露かは」(新後撰集、雑下、一五〇二、経乗法師)。

6 面影を抱いて出奔するという歌の内容は、姫君が家出のときに詠んだ歌「立ち返り契りて出でし面影を憂き身に添へて我ぞ出でぬる」「三十四①9」に似通う。

7 「ただ姫君の慕ひ給ひし面影」「五十九①19」。「女君の御面影、身に添ひて」「同②14」。

8 「風葉集・雑三・一三七二には「本意とげてのち、おなじ人のもとにさしおかせける／哀とも思ひおこせよしら雲のたなびく山に跡たえぬとも」(しのびねの中将)とある。古本においてはこのような歌が手紙に記されていたのであろうか。内容から推して「有明の」「思ひ入る」に続く三首目の歌であったと考えても差支えない。あるいは詞書に「本意とげて後」とあるから、置手紙の中の歌ではなく、後に姫君のもとに送った歌であるかもしれない。出家後の歌とすれば、古本の男君は姫君への未練を断ちきれずにいたことになり、潔い出家ではなかったことが推測される。」(広島平安文学研究会「古代中世国文学」5、昭和六〇年一二月)。なお現存本も「潔い出家」ではない「五九①21②16、六十六」。

9 姫君の将来を「思ふ心」があるからこそ別れた。すなわち愛するが故に我が身を引いて姫君を見捨てたのであり、その方が姫君

にとつて幸せになると説く。 10 「ただ、よく候ひ付き給へ。」〔五十六①5〕の繰り返し。 11 「いかなる野の末にても」〔四十五26〕。 12 「いかなる所へも引き具して」〔五十一8〕。 13 「ただ今よりは、吾子が事をこそ思さめ。」〔五十六①14〕。 14 若君のことに及ぶと胸がつまり、これ以上落ち着いて書けない。中納言の考えは、宮中で姫君と密会したとき〔四十五、五十六〕と同じで、手紙の内容も変わらず、このままでは物語は進展せず。もはや中納言を軸に、物語は進展しない。〔六十五6〕参照。 15 「たばかり」〔本章2〕ではないかという不安にさいなまれながらも、一縷の望みを繋いでいたが、この手紙が希望・信頼さらには愛情も打ち碎いた。 16 参考「例の、(匂宮の)面影離れず、(浮舟は)たへず悲しくて、この御文を顔に押し当てて、しばしはつつめども、いといみじく泣きたまふ。」(浮舟、一七八頁)。 17 参考「(光源氏が須磨に行った後)二条院の君は、そのままに起きも上りたまはず」(須磨、一八一頁)。 18 「有明の月くまなきに」〔五十六②3〕。 19 「思されて」の「れ」は、自発の助動詞。もはや再会できないとは思いたくないが、自然に不吉な考えに襲われてしまう。 20 「人目」を気にするのが、貴婦人の嗜み〔二十八②9〕。参考「(牛車内で六条御息所は)涙のこぼるるを人の見るも、はしたなけれど」(葵、一八頁)。「ともかくも思ひわかれず、ただ涙ぞこぼるる。人や来ると涙はつれなしづくりて」(『蜻蛉日記』一三七頁)。

## 六十二

①さる程に、中納言失「う」せ給ひぬと、上も聞こしめして、『あさましく世の光、失せぬる』と思し嘆かれ給ひて、<sup>4</sup>「あやし<sup>5</sup>く、もの思ひつる様「さま」の、著「しる」かりし故「ゆえ」ぞ」と、御心一つに思し合はす。<sup>7</sup>

その御ゆかりの人々も参り給ひて、「いみじう思ふ<sup>8</sup>人<sup>忍音上</sup>の侍るに、また大将のことを大殿<sup>父上</sup>「おほいどの」はのたまひしよりして、思ひの晴ることなかりし。それに、この人の行方「ゆくへ」もなくなりにしかば、思ひかねて、かく

なりぬ、とこそ承「うけたまは」れ」と奏「そう」しければ、『さればこそ、この人の事なりけれ』と、いとどあはれに思しめす。<sup>9</sup><sup>10</sup><sup>11</sup>

1 中納言出奔の噂は瞬く間に京中に広まり、最後に帝の耳に入る。 2 参考「光、隠れたまひにし」（光源氏の死。勾宮、一一頁）。「殿（土御門邸）の内にはじめて世の光（後一条帝）をとり出でさせ給しよりはじめ」（『栄花物語』著るはわびしと嘆く女房、三八八頁）。「よの中の人々、いみじかりつる世のひかり、いかになり給ふべきにかと」（『苔の衣』二）。 3 「嘆かれ」の「れ」は、自発の助動詞。帝は中納言がしばらくいないだけで「つれづれ」「五五14」になるほど、中納言を逸材として高く評価していた「四十四⑤23の注」。 4 「あやしく、この頃は、もの心細げに見ゆるは、なほただにはあらじ。」「三十九③11」。 5 「中納言はこの頃、いみじく物思ひたる様のしるきは、」「四十①19」。「ことさら物思ひたる気色の見えつるに」「四十三1の次」。 6 帝はあまりのショックに、初めは世の光が消えたとしか考えられなかったが、落ち着きを取り戻すと、今度は失踪の原因を探索し始めた。 7 「思ひ合はする人の違はずは、げにいかばかりの人にか心を移し給はん。」「四十四①11」。 8 セリフの中で大殿には敬語を使うが、中納言に対しては敬語を使わず。会話の主は、中納言より官職が高いか。 9 このセリフの内容は真実で、核心に触れている。内情に通じているのは、当事者とその家族だけかと思いきや、縁者たちも知っていた。狭い貴族社会では、秘密は保持しにくい。ただし内密の話であるため、帝には今まで誰も話さなかった。帝はまだ知らないと考えて報告しているが、実は誰も知らないヒロインの行方を、帝が知っているとは皮肉なこと。 10 「もし、この心を尽くす人の事を思ふらむ。」「三十九③12」で疑い始め、「さればよ。いかさまにも、このゆゑ。」「四十①18」で確信を得た。 11 宮中において中納言が忍音と密会したこと「四十五、五十六」を帝は知らないので、「あはれ」と思った。

②その後「のち」、例の局「つぼね」へおはしたれば、引きかづきて起きも上がらず。今は、憚「はばか」る所もなくうち出「い」でて、「中納言こそ失「う」せにけれ。いかに悲しく思すらむ。されども、いづくの岩「いは」の中までも、引き具したらばこそあらめ、片思ひこそ由「よし」なけれ。まろならば、いかなる苔の下までも、もろともに隠れなむ」とて、引き動かし給へば、忍び音「ね」も現「あらは」れぬべく泣き給へば、我も御涙のこぼれて、いとほしく御覽ず。『ただ今は、この思ひのせむ方「かた」なからん』と思せば、さのみ難「むつか」しく、戯「たはぶ」れもし給はず。

1 「帝、例の渡らせ給ひて」「四十①1」以来、変わらず。 2 帝と初対面の時も「衣、引きかづきて」「三十九①8」であったが、今回は泣いているからでもある。「三十八34」参照。 3 「いとど上のおはします折も、起きだに上がり給はず」「四十七1」。姫君が失踪したショックで、中納言が「引きかづきて起きも上がり給はず」「三十四②8の次」の時とは立場が逆転。 4 帝は最初から傍若無人に振る舞っていたので「三十九①14、四十四②17の注」、今さら「憚る所もなく」とは奇異に思われるが、「今は、中納言も都になれば、憚るべきにもあらず」「六十八16」から推すと、中納言に遠慮していたらしい。 5 中納言も、「いかなる所へも引き具して、巖「いはは」の中にも、もろともに過ぎしなばや。」と考えた「五十一9」。 6 「いづくの野の末までも、引き具「ぐ」し奉りてこそ、あらまほしけれども、吾子「あこ」が事を思ふ故「ゆゑ」ぞよ。」「中納言の手紙。六十一11」。まだ子供がいない帝には「(七十三2)、中納言の親心まで考えが及ばない。 7 「されど片思ひは、よしなき事。」「四十四①18」。相変らず帝は中納言を一方的にけなし、その分、自分を持ち上げて姫君に迫る。 8 広島平安文学研究会は参考歌として、和泉式部の名歌「もろともに苔の下には朽ちずして埋もれぬ名を見るぞ悲しき」を引く。恋歌では、「忍びつつこの世つきなば思ふこと苔の下にやともに朽ちなん」(『六百番歌合』忍恋、六二三、有家。新後撰集、八〇三)。 9 中納

言が姫君を捨てたのは「思ふ心のあれば」「六十一」9」で、愛情と深慮遠謀によるが、帝は薄情の証拠と決め付け、姫君の気を引こうとする。10帝のセリフは従来の繰り返しが多く、忍音との仲は進展せず。「恋情と家族愛の狭間に苦悩する中納言、片や宮中を脱出しても純愛を貫こうとする姫君、こうした二人の心中を、まったく付度しようと思せず、執拗にからむ態度は、帝王の権威も地位も忘れた愚かさといえよう。」（『中世王朝物語全集』解題、一五八頁）。11今までは人目を気にして「引きかづき」「本章②2」、泣き声がもれないようにしていた。しかし今やその気配りもせず「人目も知らず」「六十一」20、「忍び音も現れぬべく泣き給」ということは、「忍び音の尽きせぬ」「四十四①9」ヒロインが、「忍音の君」「三十九④3。四十六」から別人になることを暗示する。12帝はもらい泣きしやすく、涙もろい「三十九①24」。参考「亡き大君の話を薫から聞いた匂宮は」色めかしく、涙もろなる御癖は、人の御上にてさへ、袖もしぼるばかりになりて」（早蕨、三三九頁）。13帝は中納言と忍音の密会を知らないの、「あはれ」「本章①11」とも「いとほし」とも思う。14以前は、「いろいろに戯れさせ給へば、むつかしくて」「四十①14」であったが、今は同情以外に、ライバルの中納言がいなくなったという安堵感から、余裕をもって接することが可能になった。時が経てば自然に落ちる果実を待つ心境。

## 六十三

しばし日数「ひかず」経「ふ」るままに、いよいよ泣き焦がれ給へば、上、渡らせ給ひて、「今はいかに思ふとも、甲斐「かひ」あるべきかは。力無き事と、思ひなしておはせよ」と慰め給ふも、苦しきに、悲しきこと限りなし。

1「忍び音も現れぬべく泣き給」「六十二②11」は増す一方。2大倉比呂志氏は、これが本作品で使用された「ち



からなし」の最後の用例であることに着眼して、「このことばを帝が発することによって、姫君の気持ちはともかくとして、帝が姫君を完全に自分の専有物として烙印を押そうとする記号」であり、「このことばがなくなることは男君と姫君との断絶を意味しよう」と論じられた（同氏「しのびね物語」、『体系物語文学史』4所収、有精堂、平成元年）。参考「これ（若君が内大臣に引き取られたこと）も力なきことと、思しなし給へ。」〔十八②7〕。3「なす」は作為・努力・強制などの意を含む接尾語。無理ではあるうが、努めてそう思うようにしてください。」（光源氏が空蝉を口説いたセリフ「さらに浅くはあらじと思ひなしたまへ。」帚木、一七五頁の頭注）。4慰めると却って苦しく悲しみが増すのでは、帝の立つ瀬がない。

## 六十四

かくしつつ、五月にもなりぬ。五月雨「さみだれ」しげく、晴れ間「ま」も無く、かき曇りたる所々を、この忍び音「ね」は、なほ眺め増さりて、『恋しき人を夢にも見ばや』と思せども、微睡「まどろ」まねば、夢も無し。『若君をなりとも、いかにして見る業「わざ」してん』と、思し嘆きて、この数珠「ずず」・扇「あふぎ」を忘れ形見と御覧じて、

<sup>忍音上</sup>憂き人の形見の扇折々「をりをり」に涙を誘ふ風ぞ吹き添ふ<sup>12</sup>

とうちながめて、過ぐし給ふ。

1空も心も、晴れる間がない。自然と感情の一致。2頭注「所々を 按「そら」の誤なり」。この箇所、第一系統は当該本文が無く、第二系統は「所々を」「そらを」「そらに」に分かれる。3忍び泣きという意味の「忍び音」は、

この例が最後。 4 「眺め」に「長雨」を掛ける。参考「五月雨は（紫の上を亡くした光源氏は）いとどながめ暮らしたまふより外「ほか」の事なく」（幻、五二五頁）。 5 参考「うたた寝に恋しき人を見てしより夢てふものは頼みそめてき」（古今集、恋二、五五三、小野小町）。 6 参考「君は（夕顔の）夢をだに見ばやと思しわたるに」（夕顔、二六七頁）。 7 熟睡より浅い眠りの方が夢を見やすいが、うたたねもできず不眠状態が続く。参考「わすれてまどろませ給時なければ、ゆめのうちにもあひ見たまふ事はありがたし。」（『唐物語』。米田真理子氏「『しのびね物語』の構造―「長恨歌」を視点として―」、「詞林」26所収、平成十一年一〇月）。 8 「源氏物語・総角」「亡せ給ひて後、いかで夢にも見たてまつらむと思ふを、さらにこそ見たてまつらね」（故八宮を二人の姫君が恋慕う場面）と類似した表現。」（広島平安文学研究会の注）。宮中に身を潜めた頃の、「憂きに紛れぬ恋しさの、寝れば夢、覚むれば面影立ち添ひて」「三十八30」よりも深刻。中納言のセリフ「我が身こそ、ただ今よりほかは夢ならずして、見も見えもせじ。」「五十六①18」さえ、実現しない。参考「（亡き父八の宮は）夢にだに見えたまはぬよ。」（大君の思い。総角、三〇一頁）。 9 中納言とは夢の中でも会えないとわかり、若君との再会に希望を託すようになる。夫婦愛が終り、母性愛が芽生え、姫君に変化が生じる。物語の新しい展開に、若君が活用される。 10 「御数珠と扇を置き給ふ」「五十六①30の前」。 11 忘れ形見の扇は、班女の扇（寵愛を失った我が身を、秋風が吹くと捨てられる扇に例えた）に見立てると、捨てられた姫君の象徴になる。 12 私には涼風ではなく、「涙を誘ふ風」が吹く、という意。参考「夕されば草葉の露を吹き過ぎて涙を誘ふ袖の追ひ風」（『隣女集』秋、六七）。

## 六十五

大殿「おほいどの」・北<sup>母上</sup>の方、日に添へて、おぼし慰むる世なく、泣き恋ひ給へども、甲斐「かひ」なし。若君は、

「な<sup>1</sup>どて、おはせざらん」とて、折々泣き給へば、いとど涙催「もよほ」されて、『せめて疾「と」く、七<sup>4</sup>つになり給へかし。内<sup>5</sup>へ参らせて、中納言と思はん』と、明け暮れ、いとほしき事にし給ふ。

1 若君は母親と別れたときも、同様のセリフ「母君は、いづくへおはしけるぞ。あこをば捨てて。」[四十一14]を言った。参考「な<sup>1</sup>どか、父君「ててき」の久しく見えざらむ」(出家した父を慕う子のセリフ。『多武峰少将物語』)。2 まだ子供で父の通世を十分理解できない若君(満二歳半)は、父親を思い出したときだけ泣く。いつも泣いている内大臣夫妻とは対照的。参考「君(若紫)は、男君(光源氏)のおはせずなどして、さうざうしき夕暮などばかりぞ、(亡くなった)尼君を恋ひきこえたてまつりて、うち泣きなどしたまへど」(若紫、三三五頁)。3 何も知らない、あどけない孫の片言を聞くと、ますます悲しくなる。「五十七9」参照。参考「(須磨にいる源氏を八歳の)春宮はまして常に思し出でつつ、忍びて泣きたまふ。見たてまつる御乳母、まして命婦の君は、いみじうあはれに見たてまつる。」(須磨、一九七頁)。4 童殿上は七歳から、が当時の習わし。「まだ小さき七つより上「かみ」のは、みな殿上せさせたまふ。」(若菜下、一七二頁)。源氏物語では夕霧が八歳(落標、二七四頁)、頭中将の子が「八つ九つばかり」(賢木、一三三頁)、鬚黒の息子たちが十歳(真木柱、三七〇頁)で童殿上を始めた。5 童殿上の件は、中納言の置き手紙に書かれていた「六十12」。6 若君は忍音の君にとって生きる糧になったように「六十四9」、祖父母にとっても唯一の心の支えになり、今後は若君が物語を進める軸になる。「六十一14」参照。

## 六十六

山籠「ごも」りの中納言は、心<sup>1</sup>ばかりは行ひ給へども、なほありし面影<sup>2</sup>の、ともすれば恋しく、おぼし忘るる世な

く、櫛<sup>3</sup>「しきみ」摘み給ふ山路「やまち」の露に御涙<sup>4</sup>争ひて、墨染「すみぞ」めの御袖<sup>5</sup>、乾<sup>6</sup>「かわ」く世もなく、し  
をれ給へり。

1 「心の限りは行ひて、つひに涼しき道に赴きなば」「四十五19」という決意が、実行できていない。 2 「女君の御面影、身に添ひて、念仏も心汚く紛るる」「五十九②14」のまま変らず。 3 「櫛摘む山路の露にぬれにけり暁おきの墨染めの袖」(新古今集、雑中、一六六六、小侍従。広島平安文学研究会の注)。この歌は、『とはずがたり』の「櫛摘むあか月起きに袖濡れて見果てぬ夢の末ぞゆかしき」(新大系、巻二、七七頁)にも、引歌として用いられている。(中村友美氏、前掲論文)。 4 参考「風荒らかに吹き時雨さとしたるほど、涙も争ふ心地して」(葵の上を亡くした源氏の心境。葵、四八頁)。 5 参考「わが袖は潮干に見えぬ沖の石の人こそ知らね乾くまもなし」(百人一首、二条院讃岐)。 6 中納言は「忘るる世なく」「御袖、乾く世もなく」「本章」であり、両親も「慰むる世なく」「六十五」で、表現は共通する。しかし親は息子を思っているのに、息子は姫君のことしか頭にない、とは皮肉。 7 「しをれ」(萎れ)の箇所、底本は「しはれ」、筑波大学本は「しほり」(絞り)。「しのびねの姫君の特権であった「しのびね」は、出家したきんつねへと受け継がれることになるのである。こうした「しのびね」(忍び泣くこと)の描写にも、やはり、物語の中で途切れることのない一貫性が認められるのである。」(米田真理子氏、前掲論文)。

## 六十七

秋にもなりぬ。四方「よも」の山辺「やまべ」の紅葉「もみぢ」して、色々に見ゆるにも、『世を背き果「は」つべき始めにこそ。ありし嵯峨<sup>3</sup>「さが」にて見初<sup>2</sup>「みそ」めしも、この世ばかりの契りならじ』と思し出<sup>5</sup>「い」づるに、

ただ今の心地して恋しきこと限りなし。<sup>6</sup>

1 「〈紅葉〉が二人の出会いの表象であったと同時に、出会いそのものが男主人公の出家への契機のものであったと語られている。とすれば、〈紅葉〉が〈俗〉と〈聖〉との両義性を持っていると考えられる。その〈紅葉〉は衰退していく季節の終焉を飾る最後の残照であるが、それは一時的なものであって、永続するものではない点からも、結局は男主人公が女主人公と添い遂げられず、男主人公が〈聖〉なる世界に入っていく契機を内包しているといえよう。」（大倉比呂志氏『しのびね』論、『源氏物語と王朝世界』所収、武蔵野書院、平成二二年）。 2 以前は「ありし秋の夕べさへ恨めしき心地す」〔三十四①25〕であったが、今では仏縁を思うようになった。 3 「嵯峨野わたりの紅葉ご覧ありて」〔二①1〕。 4 参考「何事もこの世ひとつならぬ事」〔四十五12〕。「いかなりし昔の契りならむ」〔五十六②14〕。 5 紅葉を見ても姫君のことが思い出され、修行の邪魔になる。 6 実際は四年前。 7 恋しさは「ともすれば恋しく」〔六十六2〕のまま、断ち切れていない。

## 六十八

帝はとかく心を取り給へども、さらに一言「ひとこと」の御返事をもし給はず、すでにその年も暮れぬ。<sup>1</sup>  
明くる春になれども、姫君の御思ひ改まるべくもなし。上は、『あまりに、けしからぬ事』と思して、内侍に、「ただ連れて参れ。自「みづか」らの心に任「まか」せては、いつか限りあるべき。いと、むくつけき業「わざ」かな。かかる例「ためし」やはある。まろが、かく心を尽くしたることこそ、いまだ覚えね。今年「ことし」三年「みとせ」、安き空なく、心を見るに、さらに靡「なび」き難「がた」きは、『契り通して憎し』と言ふらむことにや。今は、中<sup>勅言5</sup>

納言も都になければ、憚<sup>16</sup>「はばか」るべきにもあらず。そこに、よく言はぬぞ<sup>17</sup>と、まめやかに辛「つら」しと思し  
て、責め給へば、御理<sup>典侍心</sup>「ことわり」にかたじけなく覚えて、局「つぼね」へ帰りて、<sup>典侍詞</sup>「これほどに慰め奉るに、なほ、  
かく沈み給はば、母上も自<sup>21</sup>「みづか」ら具し奉りて、いづちへも、まかりなむ。これに一所<sup>24</sup>「ひとところ」に、おは  
せ。さらば、世の常「つね」にて宮仕へをも、し給へ。御心の行かざらむほどは、上もひたぶるに思し寄ることあら  
じ。まづ参りて見給へ」と、やうやうに口説「くど」きて、御髪<sup>28</sup>「みぐし」かきくだし、涙に濡れぬ。御衣、召し替  
「か」へさせなどして、内侍、繕<sup>32</sup>「つくろ」ひ立てて、上へ参り給へば、上はいと嬉しと思して、内侍に寄りかからせ  
おはしまして、すこし隔てておはします。「しのびねの内侍と言はん」とて、うち笑はせ給へば、また例の涙、先立  
ちて、うちうつぶきてる給へば、<sup>勅言</sup>局<sup>40</sup>にてこそあらめ、ここにて涙落とすは忌<sup>41</sup>「い」むなる事ぞ」とて、とかく慰め  
給へども、ただ恥づかしくも悲しくも思して、心ゆく気色「けしき」もなし。「さのみ人の心を尽くさせ給ふこそ、  
いとわりなけれ。この三年<sup>44</sup>「みとせ」は、いみじく御心に從ひて過ぎしきぬ。今はまた少し、あはれとも思ひ給へか  
し」と、いろいろに聞こえ給へば、内侍、「いかなる事ぞや。上の御返しせぬは、いと便<sup>48</sup>「びん」なき事ぞ」とのた  
まひて、内侍、局<sup>49</sup>「つぼね」へ下「お」り給へば、この忍び音も、やがて罷<sup>50</sup>「まか」で給ふ。

1 『風葉集』所載の次の一首は、このあたりにあったか。「ないしのかみ、つれなきさまに見え奉りければ、七日の  
たまはせける／しのび音のみかどの御歌／けふさへやただに暮らさん七夕の逢ふ夜は雲のよそに聞きつつ」。「現存本  
にある総数歌十九首のうち、帝からヒロインへの贈歌が一首もないのは異常かも知れない。」(『中世王朝物語全集』  
解題、一四六頁)。帝の歌は、きんつねに聞こえよがしに詠んだ一首のみ「四十二」。

2 帝と忍音の関係は「六十三」  
のまま。中納言も姫君への思いを消せず「六十七」、結局、出家後も事態は変化せず、年が暮れる。

3 頭注「古今、  
春上、よみ人しらす。百千鳥さへつる春はものことにあらたまれともわれそふりゆく」。中納言が去年の二月に出家

して以来、一年近くになる。 4 以前は「慰め」〔六十二・三〕でいたが、もはや堪忍袋の緒が切れた。 5 姫君の氣持ちに関わらず、有無を言わせぬ圧力が「ただ」にこもる。 6 帝が初めて姫君のことを聞いて発したセリフ「とく参らせよや。」「三十七・11」と内容は同じだが、語調は厳しく強い。以前は姫君の機嫌を取りに、帝が出向いた。「この頃は、御心を取らんとにや。夜昼、上の渡らせ給へば」〔四十五・1〕。「上、渡らせ給ひて」〔六十三・1〕。 7 帝の心境は、以前は「鳴かぬなら鳴くまで待とう時鳥」〔六十二・2・14〕であったが、今は「鳴かせてみよう」に作戦変更。 8 後宮の女性は皆、自分に靡くという自負心が傷ついた。〔四十四・2・8〕参照。 9 帝が姫君に言った愚痴、「かく人に愚」〔お〕れ従ふ人は、あらじと思ふ。」「四十四・3」に似る。参考「いとかく世のためしになりぬべき有様」(つれない朝顔の宮に対する光源氏の愚痴。朝顔、四七六頁)。「まろこそ、なほ例「ためし」にしつべく、心のどけさは人に似ざりけれ。」(光源氏の自称。螢、二〇六頁)。 10 帝は相手の女性が靡かないほど燃えるタイプ。〔四十四・2・7〕参照。 11 「帝はただ、このしのびねの君にのみ、御心を尽くさせおはします。」「四十六・4」。 12 帝と姫君の初会は、二年前の春か夏。それ以来、足掛け三年たつ。大倉比呂志氏は、『伊勢物語』二十四段の和歌「あらたまの年の三年を待ちわびてただ今宵こそ新枕すれ」を踏まえて、「旧夫が消息不明で「三年」が経過したならば、他の男と結婚してもかまわないという点が前提となっており、状況は異なるにせよ、これが帝の発言の根拠にもなっている」とすれば、この発言の背後には二十四段の影響が考えられ、帝は全然なびこうとしない女主人公に対して〈新枕〉を要求したものと受け取れよう。」と解釈された(前掲論文「しのびね」論)。一方、米田真理子氏は、『長恨歌伝』の「三載一意、其念不衰」に注目して、「三年の間一心に楊貴妃を思い続けた玄宗の姿を描くことにも、似通う点を認める。」と説かれた(前掲論文)。 13 「古今六帖・四・恋・二〇一五「雨やまぬ山のあま雲たちるにもやすき空なく君をこそ思へ」(貫之)を引くか。」(広島平安文学研究会の注)。参考「(光源氏は須磨で)明け暮れやすき空なく嘆きたまふ」(須磨、二二七頁)。 14 姫君は中納言との縁を守り通して、帝を憎く思う、の意か。底本は「ちぎりと

をして、にくし」。筑波大学本の「ちきりとをふて、にくし」(契り遠うて憎し)ならば、源氏物語の「いみじう思ふ人も、かばかりになりぬれば、おのづからゆるぶ気色もあるを、岩木よりけに靡きがたきは、契り遠うて、憎しなど思ふやうあなるを、さや思すらむ。」(落葉の宮を口説く夕霧のセリフ。夕霧、四六四頁)と同じで、帝とは縁遠くて憎く思う、の意。参考「契り遠くものしたまふ」(『夜の寝覚』三、二九六頁)。15以前にも帝は姫君に、「まろを憎しと思ひ給ふも、ことわりぞ。」[四十四①10]と言っていた。16「今は、はばかりる所もなく」[六十二②4]。17以前も典侍に、「ただ今はいかなりとも、慰むべき気色もなきを、よく言ひ教へよ。」[三十九②3]と頼んでおいたのに、いまだに思い通りにならず八つ当り。18参考「(朝顔の宮に夢中の光源氏を、紫の上は)まめやかにつらしと思せば」(朝顔、四六九頁)。19典侍は以前から「かたじけなし」と思い、姫君にも諭していた[四十②712]。この場面は、夕霧と彼を拒む落葉の宮と、その女房(小少将)に似る。「(夕霧は)この人(小少将)を責めたまへば、(小少将は)げにとと思ひ、(夕霧を)見奉るも今は心苦しう、かたじけなう覚ゆるさまなれば、(落葉の宮がこもる塗籠に導いた)」(夕霧、四六三頁)。20典侍の勧める「慰め」とは、気晴らしに宮仕えすること。「代はりに参り給ひて、少し慰め給へ。」[三十八22]。しかし、その気がない姫君(人目見ても慰むべき思ひならばこそあらめ)[同28]には「慰め」にはならない。21「いよいよ伏し沈み給へば」[四十②18]。22母上も典侍と同じ考えで「六十九1」、もはや頼れない。23帝が「ただ連れて参れ」[本章5]と命じたように、典侍も実力行使に出ると脅した。24頭注「ひと所に 按「に」の下「て」もし、あるへし」。実際には女房たち(中納言の君など)が残り、文字通り独りぼっちになるわけではないかもしれないが、心理的に一人にされる。しかも中納言の君も味方ではなく「四十七17」、姫君は四面楚歌。25「さらば」の箇所、筑波大学本は「さらずは」。前者の訳は、一人になれば(生きていくために)宮仕えしなさい。後者の場合は、一人になりたくなければ、宮仕えしなさい。26出仕しても、帝が嫌いならば避けられる、と丸め込む手腕は、さすがに世馴れている。「三十八20」参照。参考「御心許されぬ乱れは、よも



せじとよ。」(寢覺の上を口説く帝のセリフ。『夜の寢覺』三、二九七頁)。 27 確かに何度も帝に言い寄られ、顔まで見られているが「三十九①14」、まだ最後の一線は越えていない。これは中納言と別れて三年立つまで、帝は待っていたから(大倉比呂志氏の説「本章12」)。 28 「涙に濡れたる御髪「みぐし」梳「と」きくだし」「三十八23」。 29 「濡れぬ」の箇所、筑波大学本は「ぬれぬる」で次の「御衣」を修飾する。 30 「萎れたる御衣「おんぞ」替へ奉り」「三十八25」。 31 母君がしないのは、内侍に姫君の将来を一任したから。また内侍の方が宮中に慣れていて、慣習や流行に詳しいし、帝の好みを知っている内侍に任せれば、帝好みに仕立ててくれるから。もはや母君の出番はなくなる。 32 今までは繕わず。「上の渡らせ給ふ時は、いよいよ美しげなる様をも見え奉らじと、髪・顔の行方も知らず、鏡に向かふ事も絶えてし給はず、やつれ給へども」「四十七22」。「きんつねは出家を契機に繕うことをやめてしまうのである。(中略)逆にしのびねの姫君は、きんつねの出家後、強引な帝の召しを契機に、内侍の手によって繕われ始めるのである。(中略)両者の繕うこと、繕わないことは、きんつねの出家を契機に逆転し、その時を境に、正確な対応を見せる。繕う姿で描かれていたきんつねは、繕うことをやめ、繕わない姿で描かれてきたしのびねの姫君は、繕い始めるのである。そして、このような身なりの転機は、きんつねの出家と、しのびねの姫君の栄達という、それぞれの境遇の変化に、密接に関わるものであると言え、よって、両者の転機もここに位置するとみなされる。」(米田真理子氏、前掲論文)。 33 帝が内侍に寄り掛かるとは、内侍を信頼している表れ。その仕草により、姫君の保護者である内侍は、帝の側にいることを示す。姫君は二人の前に屈伏するしかない。 34 姫君を安心させるため。この距離は、帝と姫君の心理的隔たりも表す。 35 この名称はあだ名で、「院の侍従の内侍」「四十九2」のような女房名ではない。 36 内侍に任命する、という帝の意思表示。 37 宮中で働く内侍に「忍びね」は不似合い。また風変わりな通称に苦笑した。 38 参考「涙の先立ちて」「五十九①18」。 39 泣き顔を見られないように。以前は泣いていないときも、「ともかくも聞こえたまはで、ただうつぶきて候ひたまふ」「四十①11」。参考「(中納言は母の前で)うちうつ

ぶきて、涙を紛らはしたまへば」〔三十五②11〕。40 セリフの主を広島平安文学研究会と『中世王朝物語全集』は内侍と解釈したが、その前後の会話は帝であり、ここだけ話し手を替える必要もないので、底本の傍注に従う。41 参考「忌むなる物を」〔三十九①25〕。42 以前は「慰め給ふも、苦しきに、悲しきこと限りなし。」「六十三4。」「悲し」は変らないが、「苦し」から「恥づかし」に変化。帝に対する嫌悪感が薄らいできた。43 「まろが、かく心を尽くしたることこそ、いまだ覚えね。」「本章11」。44 「今年、三年」〔本章12〕。45 「自らの心に任せて」〔本章7〕。46 情に訴える。参考「年ごろのつもりも、あはれとばかりは、さりともし知るらむや」(つれない朝顔の宮に対する源氏の愚痴。朝顔、四六六頁)。47 参考「何さまにも御いらへなからむは、便「びん」なかるべし。」「三⑥4」。48 内侍の説教には、「いと便なき」が多用。〔四十七3〕。49 内侍は氣を利かせて退場。内侍の仕事は終り、物語には二度と登場しない。50 帝と二人きりになるのを恐れて、すぐ退出。ただし周囲には、帝付きの女房たちが控えていたであろうが、彼女たちは帝の言いなりで、窮地に立つ姫君を助けてくれない。

## 六十九

①母上<sup>1</sup>も、「今は我<sup>3</sup>を思さば、上の御心に従ひ給へ。さのみ親に心苦しき事、な見せ給ひそ。失「う」せ給ひし中納言殿も、さこそ繰り返しのたまひ置きしか。『我「われ」ひとり、御心を立てても、猛「たけ」きことあらじ』となむ<sup>8</sup> 思ひ起こし、晴れ晴れしくもてなして、見え奉り給へ。『便「びん」なく、かたじけなし』とは思さずや」など、様々「さまさま」聞こえ給へば、我が心にも『げにも』とは思へども、なほ人<sup>13</sup>は世<sup>中納言</sup>を背「そむ」き、身をやつして、慣らはぬ様「さま」になり給ふに、我が身はつれなくて、人に見え奉らん事の悲しくて、心も行かぬなるべし。<sup>17</sup>

1 母上の登場は「四十②19」以来、久しぶり。以前よりも遥かに長いセリフを発したのは、先に戻った内侍から、姫君の頑なな様子「六十八383942」を聞き、また姫君がすぐ帰ってきたので事情を察し、説教の必要を痛感したから。役目を終えたあとの内侍「六十八49」に引き続き、母上もこれ以後、物語から姿を消す。2 「も」の一字により、母上も帝・内侍の側に回ったことを示す。3 内侍の部屋を追い出されたくないし「三十八36」、また宮家の誇りを傷つけた内大臣を見返したい「三十八3940」。4 姫君が態度を変えないのは、親不孝だと諭す。参考「明日をも知らぬ親の心に違ひ給ふな。」「中納言に対する父大臣のセリフ。三十一①14」。「不孝なるは、仏の道にも、いみじくこそ言ひたれ。」(蜚、二〇六頁)。5 かつては中納言を忘れるようにと言ひ聞かせたのに「三十八40」、ここでは手の平を返すように中納言の置き手紙「六十一10」を持ち出す。中納言を愛するならば、彼の言う通りにしなさいと説く。姫君が宮仕えを拒んだ一因は、帝を選んだのかと中納言に誤解されるのが嫌だったから「三十八27」。しかし中納言に出仕を勧められた今は、断る理由はないと説き伏せる。6 手紙「六十一10」のほか口頭でも、「今は上の御心に従ひ奉り給へ。」「四十五13」、「何やかやと、もの思し乱れで、候ひ付き給へ。」「同22の後」、「ただ、よく候ひ付き給へ。いづくの末にても、かやうにて候ひ給ふと聞かば、いと嬉しかるべし。」「五十六①5」と繰り返す。母君も知っているのは、姫君から聞いたからか。あるいは密会中の会話を、隣室で聞いていたか。7 参考「たけき事もあるまじき御身を、いかに思ひて、かく立てたる御心ならむ。」(叔母の提案を拒む末摘花への非難。蓬生、三二五頁)。8 「句」は、そこに句点が付くという意味。「となむ」の後に「思ひ給へ。」を補う。9 姫君に対する帝のセリフ「少し晴れ晴れしく、もてなして見え給へ。」「四十①27」や、内侍のセリフ「少し晴れ晴れしくおはせよ。」「三十八10」と同じ。母君も帝・内侍の側。10 内侍の説教に多用された言葉。「六十八48」参照。11 内侍のセリフ「いかたじけなき事とは、思さずや。」「四十②12」と同じ。母君までもが、内侍と同じことを言うに到る。12 「げにも」の箇所、底本は「げも」。筑波大学本により改める。13 内侍が「『げにも』と思ひ給ふべくこしらへ」ても、「いよ

いよ伏し沈<sup>1</sup>んでいたとき「四十②15」と比べると、姫君の態度は軟化した。14 姫君も勤行を考えていた「三十八33」。15 宮仕えを渋る原因は、中納言への愛情から後ろめたさへと微妙に変化している。16 頭注「心もゆかぬ按、地の詞なれば「御」の字あるへし」。17 姫君の心境の変化を、草子地で推量。

②やうやう賺<sup>2</sup>「すか」し拵<sup>3</sup>「こしら」へられて、上の御方「かた」へ参り給ふ。内侍<sup>4</sup>ひき繕<sup>5</sup>「つくろ」ひなどして見るに、いと飽<sup>6</sup>かぬ光添<sup>7</sup>「そ」ひて、上の思しめすも御理<sup>8</sup>「ことわり」に思ふ。なほ、ともすれば、涙の先立ちて、うちとけたる御答<sup>9</sup>「いら」へも、し給はず、晴れ晴れしくもおはせねば、『ただ、この君の慰み給はんことを』と、上は万<sup>10</sup>「よろづ」の御遊び<sup>11</sup>に、おもしろきことどもを尽くし給ふ。

1 「六十八31」参照。2 姫君は化粧や身形に構わなくても、美しかった「四十七25」。3 参考「まことに光り輝き給ふ御さまは、明け暮れ見たてまつる人さへ飽かぬ心地する」「二6」。4 姫君はもともと、「またこのほどに光さし添ひて」「七①2」。5 参考「げに、中納言殿のわりなく思すらんも、ことわりの御様なり。」「三十三25」。6 外面は変っても、内面は「また例の涙、先立ちて「六十八38」のまま。7 母君に、「晴れ晴れしくもてなして、見え奉り給へ。」「本章①9」と言われても、まだ実行できない。8 今までの「慰め」「六十三3」は言葉のみ。これでは効果がないので、懐柔策として「万の御遊び」「本章②9」に乗り出す。9 いろいろな「遊び」を、手をかえ品をかえ試す。10 無理遣り来させても帰ってしまうので「六十八50」、引き止めるために「遊び」を催す。参考「(懐妊した大君を慰めるため冷泉院は)明け暮れ御遊びをせさせたまひつつ」(竹河、八九頁)。11 「まろが、かく心を尽くしたることこそ、いまだ覚えね。」「六十八11」と怒ったのに、懲りずにまた、ご機嫌取りに夢中になる。これでは姫君の方が、立場が上。

四月<sup>1</sup>「うづき」わたり、藤壺「ふぢつば」の藤、盛りにおもしろきに、例<sup>2</sup>の、「しのびねの内侍、参り給へ」<sup>4</sup>と、御使<sup>5</sup>ひたびたび重なりぬれば、藤・山吹の七ばかりに、青き単「ひとへ」、浮き紋の唐衣<sup>7</sup>「からぎぬ」、赤き袴「はかま」など、心異<sup>8</sup>「こと」に内侍<sup>9</sup>つくろひたてて、「久しう鏡<sup>10</sup>にも向かひ給はぬ御顔、さのみは、うち捨て給はん」<sup>12</sup>と、少し引き繕「つくろ」ひ給へる有り様、ただ今の世に、また類<sup>13</sup>「たぐひ」あるべき人もなし。失<sup>14</sup>「う」せ給ひし中納言の御妹「いもうと」、桐壺の御方「かた」こそ、『世<sup>14</sup>には、かかる人もありける』<sup>16</sup>と、上も思しめして、また並<sup>18</sup>ぶ人なかりしか。これはいとほしげに、愛敬<sup>20</sup>「あいぎやう」は、なほ勝<sup>21</sup>「まさ」りて見ゆれば、上は斜<sup>22</sup>「なの」めならず御覧<sup>23</sup>じて、『日頃、涙に埋<sup>24</sup>「うづ」もれて、沈み伏したるをさへ美しく思ひしに、少し引き繕「つくろ」ひ給へば、この世の人とも見えず。これを失<sup>27</sup>ひて、世<sup>中納言</sup>を背<sup>28</sup>「そむ」くらんも理<sup>29</sup>「ことわり」ぞかし。まろは今より後「のち」、片時「かたとき」も見ずは恋しかりなむ』<sup>30</sup>と、飽<sup>30</sup>「あ」かず思しめす。

1 頭注「四月わたり 按「わたり」は「はかり」の誤也」。 2 藤壺に后・女御がいないので、しのびねの内侍を呼べる。藤の花盛りを一緒に見ようとしたのは、しのびねを慰めるためでもある。「よろづの御遊び」[六十九②9]の一環。 3 帝が笑いながら冗談でつけた名称「六十八35」が、通称になる。 4 参考「わりなくまつはさせたまふあまりに、さるべき御遊びのをりをり、なにごとにもゆゑある事のふしぶしには、(桐壺帝は桐壺更衣を)まづ参「ま」う上「のぼ」らせたまふ」(桐壺、九五頁)。 5 まだ、しのびねの内侍は帝に打ち解けず「六十九②67」、使者が一度来ただけでは参上せず。 6 折節に合った装い。長年、宮仕えして慣習や流行に詳しい内侍が、「心異に内侍つ

くろひたて」「本章8」だから。参考「女房、桜の唐衣ども、くつろかに脱ぎ垂れて、藤、山吹など色々このまじうて」(『枕草子』「清涼殿の丑寅の隅の」)。7女房の正装。8「内侍、繕ひ立てて」「六十八32」、「内侍ひき繕ひ」「六十九②1」より、一段と入念に整えたのは、呼ばれた場所が今までの所(清涼殿か)ではなく藤壺で、「藤の宴」「七十一1」という公の場に出て大宮人の目に触れることを予想したから。参考「(光源氏に張り合って内大臣は)御装束、心ことにひきつくろひて」(行幸、二九六頁)。9内侍がこれほど一生懸命になるのは、しのびねの内侍が寵愛を受ければ、ご褒美として念願の退職「三十八21」が許可されるから。10「鏡に向かふ事も絶えてし給はず、やつれ給へども」「四十七24」。11「捨て」の主語は帝で、「鏡を見ないようでは、帝に捨てられるでしょう」と訳せる。この箇所、筑波大学本は、「久しう鏡にも向かひ給はぬを、さのみはいかが、うち捨て給はん」で、「捨て」の主語はしのびねの内侍になり、「どうして、いつまでも鏡を見ずにいられましょうか」と訳せる。12衣裳は「心異に内侍つくろひたてて」「本章8」であるのに、化粧は「少し」に留めた理由は「本章25」参照。ただし「少し」の箇所、筑波大学本は「内侍」。13「鏡に向かふ事も絶えてし給はず、やつれ給へども、なかなか美しき様の類」「たぐひ」なければ「四十七24」。参考「世にたぐひなしと見たてまつりたまひ、名高うおはする宮の御容貌」「かたち」(桐壺、一二〇頁)。14「(桐壺の女御は)」さらにただ今の世には、ありがたく見え給ふ」「三⑨4」。15参考「ものの心知りたまふ人は、かかる人(光源氏)も世に出でおはするものなりけりと、あさましきまで目を驚かしたまふ。」(桐壺、九七頁)。16頭注「ありける 按「る」は「り」の誤也」。17「上も」とは、中納言のみならず帝も、の意。「本章22」参照。また宮廷内で美人を見慣れた帝でさえ、の意。「三十九①22」参照。18「ただ今、桐壺の御方、並びなくて時めき給へば」「十三①7」。19「いとほしげ」は、両親とも健在の桐壺にはない資質。帝の父性本能をくすぐる。ただし筑波大学本は、「いとほしげ」ではなく「いとど」。20桐壺も「愛敬こぼれて」「三⑨3」。21「(忍音の君の)あてに美しさは、(桐壺の)女御の君にも、なほたちまさりてやと(きんつねは)おぼす」「五③6」。

22 出家した中納言も、しのびねの内侍と桐壺の女御を比較している「三⑨6」「五③4」。「女主人公の美しさが桐壺女御よりもまさっていることを男主人公と帝という複眼的な視点から語られることによって、女主人公の美貌が浮き彫りにされているわけだが、それが巻頭と巻末とで語られることで、首尾照応しているところから、かなり緻密な構想が立てられていたといえよう。」（大倉比呂志氏、前掲論文『しのびね』論）。 23 頭注「ふしたるをさへ 按こゝも「たに」の誤也」。 24 「やつれ給へども、なかなか美しき様の類なれば」「四十七25」。 25 少し身繕いしたただけで、帝はすっかり魅了される。内侍の「少し」「本章12」は効果観面。 26 天女、あるいは仏の化身。参考「三歳の光源氏は」いとど、この世のものならず、きよらにおよすけたまへれば」（桐壺、一一三頁）。「源氏は」この世のものとも、おぼえたまはず」（若紫、一二八頁）。「須磨という」所がらは（源氏は）まして、この世のものと見えたまはず」（須磨、一九二頁）。 27 忍音の君が宮中にいることを中納言は知らない、と帝は思い込んでいる。 28 「げに、中納言殿のわりなく思すらんも、ことわりの（忍音の）御様なり。」「三十三25」。 29 参考「（明石の姫君を祖父の入道は）片時見たてまつらでは、いかでか過ぐさむとすらむ」（松風、三九三頁）。「（勾宮は浮舟を）時の間「まも見ざらむに死ぬべし、と思し焦がる」（浮舟、一二三頁）。 30 「いとど飽かぬ光添ひて」「六十九②2」。参考「（勾宮は浮舟を）見れども見れども飽かず、そのことぞとおぼゆる限なく、愛敬づき、なつかしくをかしげなり。」（浮舟、一二三頁）。

## 七十一

「今日は藤の宴「えん」あるべし」とて、若き人々参り集「つど」ひ、物の音「ね」ども調べ遊び給へば、上、しのびねの内侍、御側「そば」に置かせ給ひて、「あの遊ぶ人々の中にも、ありし中納言の様「さま」したる人こそな

けれ。様形<sup>5</sup>「さまかたち」ばかりにもあらず、吹き立つる物の音「ね」ども、うち聞くより、すすろに身にしみて、美<sup>9</sup>しきことの尽きせざりしこそ恋<sup>10</sup>しけれ。何事につけても、映<sup>11</sup>「は」えなき心地のするを、同じ心に思ふ人もあらんとて、御覽<sup>忍音上ラ</sup>じおこせ給へば、顔うち赤めて、まづ涙落<sup>13</sup>つれば、扇<sup>14</sup>にて紛らはし給へるさまの心苦しげなり。

1 この「藤の宴」も、しのびねの内侍を慰めるため、藤壺で催された。「七十2」参照。 2 参考「右大殿の弓の結  
「けち」に、上達部・親王「みこ」たち多くつどへたまひて、やがて藤の宴したまふ。」（花宴、四三三頁）。 3 普通  
名詞の「忍び音」は「六十四3」でなくなり、代りに「六十八35」で初めて現れた「しのびねの内侍」（固有名詞）  
も、これが最後。ヒロインの属性であった「忍び音」が、ついに消え、男主人公に受け継がれる。（米田真理子氏の  
論。「七十二4」参照）。 4 お側に置くのが習慣になった。以前は少し離れて向かい側「六十八34」。 5 「まこと  
に光り輝き給ふ御さま」「二6」。 6 中納言は笛の名手。「三十九34」「四十13」「四十九19」「五十17」。 7 帝  
も忍音も中納言の笛の音を、他の人のと識別できる。「三十九35」「同44」。 8 参考「（光源氏が）「なぞ越えざ  
らん」と、うち誦「ず」じたまへるを、身にしみて若き人々思へり。」（若紫、三一七頁）。 9 「ただ人の物の音ど  
もの中に、中納言の笛の音ほどなつかしきはなかりつる。」「四十12」。「藤花の宴で楽を奏でる若殿上人たちを見て、  
ことさら中納言のことを話題にして姫君の心を乱そうとするのも、以前から見られた帝の屈折した性格を表わすもの  
と言えようか。」（広島平安文学研究会の注）。 10 参考「まして上（今上帝）には、御遊びなどの折ごとにも、（亡き  
柏木を）まづ思し出でてなん偲ばせたまひける。」（柏木、三三〇頁）。 11 帝のセリフと忍音の反応は、須磨にいる  
光源氏を偲び朱雀院が朧月夜に語った場面に似る。「その人（光源氏）のなきこそ、いとさうざうしけれ。いかにま  
して、さ思ふ人（朧月夜など）多からむ。何ごとも光なき心地するかな」とのたまはせて、（中略）（朧月夜は）ほろ  
ほろとこぼれ出づれば」（須磨、一八九頁）。 12 参考「（朱雀院に恨まれ）女君（朧月夜）、顔はいと赤くにほひて、



こぼるばかりの御愛敬にて、涙もこぼれぬるを」(澤標、二七〇頁)。13「この日も藤の宴を催したのだが、その笛の音に、しのびねの姫君は、きんつねを思い起こして涙を落とすのである。この場面は、『長恨歌伝』の楊貴妃を失った玄宗がその喪失感を紛らわせずにいる場面に、類似点を見出す。(中略)四季折々に梨園の弟子たちが玉笛を吹き鳴らし、玄宗は霓裳羽衣の曲の一声を聞き付け、生前の楊貴妃がその曲を舞ったことを思い出し、むなしくなるのである。」(米田真理子氏、前掲論文)。14「まづ涙落つれば」は、「また例の涙、先立ちて」「六十八38」と同じ。しかし以前は「うちうつぶきてる」た「同」のに、今は帝に対して気を遣い「扇にて紛らは」すだけの心の余裕がある。参考「(きんつねは)御顔匂ひて涙のこぼるるを、扇にて紛らはし給ふ御さまを、母上はまことにあはれと思す。」「十八④9」。「(六歳の東宮は)涙の落つれば、(母藤壺に)恥づかしと思して、さすがに背きたまへる」(賢木、一〇八頁)。

## 七十二

月日<sup>1</sup>も過ぎ行くに、さのみも、いかが沈み給はん<sup>2</sup>。せちなる御たはぶれの折は、心ならずうち笑ひ給へる折もあれば、上は珍しく嬉しき事に思しなして、この頃はまた、余「よ」の御局「つぼね」へはおはしますさず、昼は日暮らし、籠<sup>8</sup>「こも」りおはします。暮るれば御使ひの暇「ひま」なきを、人は、「誰」<sup>11</sup>「た」が参り給ふとも聞こえぬに、かく時めき給ふ<sup>12</sup>と、ささめく<sup>13</sup>。

1「年月「としつき」重ならば、(忍音は中納言を)忘れてこそおはせめ。」「五十一14」と、中納言が予想した通りになる。2「なほ、かく沈み給はば」「六十八21」。「日頃、涙に埋もれて、沈み伏したる」「七十23」。3草子地。

「心も行かぬなるべし。」「六十九①17」と同じく、姫君の心境の変化を推測。 4 「微笑をもらす。この振る舞いは忍び泣く女君の境遇の転機の符牒である。(中略)しのびねの姫君は、若君ときんつねから引き離され、泣き続けた。しかし、きんつねの出家後に、帝の寵を受け入れ、その忍び泣きをやめる。そのとき、しのびねの姫君が忍び泣く「しのびね」の物語は、転機を迎えることになる。しのびねの姫君の「しのびね」は、栄達をきっかけに、しのびねの姫君から離脱し、出家したきんつねが、その「しのびね」を受け継ぐ。つまり、「しのびね」は消滅することなく、物語の転換点において、主体を入れ替えて、継承を果たすのである。そこに、主題の代替や、物語の改変を想定しなくてはならないような破綻はないのである。」(米田真理子氏、前掲論文)。 5 中国では殷の紂王や周の幽王が、妃を笑わせるために理不尽なことをして国を傾けた。 6 参考「御局は桐壺なり。あまたの御方々を過ぎさせ給ひて、隙「ひま」なき御前渡り」(桐壺、九六頁)。「冷泉院は」いとど、ただこなた(大君)にのみおはします。」(竹河、九四頁)。 7 参考「昼は日ぐらし、夜は目のさめたるかぎり、灯「ひ」を近くともして、これ(源氏物語)を見るよりほかのことなければ」(『更級日記』三〇二頁)。 8 内侍なのに帝が召し寄せず、女御のように帝が出向くのは異状。これは、しのびねの内侍がなかなか参上しないから。あるいは帝付きの女房・臣下の目を気にせず語り合いたいから。 9 参考「ある時には大殿籠りすぐして、やがてさぶらはせたまひなど、あながちに御前去らずもてなさせたまひしほどに」(桐壺、九五頁)。 10 「御使ひ、たびたび重なりぬれば」(七十五)と同じ。しのびねの内侍が「余の御局」(本章6)に遠慮して、なかなか参上しないとも考えられる。 11 「帝の、この頃は誰が参るとも聞こえぬに、この御局へしげく渡らせ給へる。いかなる更衣などの、御心にしまたるが候ひ給ふか。」「中納言の心中描写。四十四①6」。 12 参考「すぐれて時めきたまふありけり。」(桐壺、九三頁)。 13 参考「他「ひと」の朝廷「みかど」の例「ためし」まで引き出で、ささめき嘆きけり。」(桐壺、一一三頁)。「誰ならむ。おぼろけにはあらじ」と、ささめく。」(六八)に引用)。

明くる春、若宮<sup>1</sup>をさへ生み奉り給へば、いまだ御子「みこ」もおはしまさぬことを、口惜<sup>御門ノ</sup>「くちを」しく思しめすに、いとど嬉しく珍しく思しめされて、御幸<sup>4</sup>「さいは」ひのめでたきこと限りなし。

1 後宮での競合は、若宮誕生により決着がつく。しのびねの内侍は身分の低い女官とされていたが「七十二1」、出産は実家で行なうので、そのとき素性も世に知られたか。『しぐれ』では、懐妊した承香殿が産室として実家を修理したことにより、出身が世人に知られた（新大系『室町物語集』五二頁）。2 参考「今まで御子「みこ」たちのなきこそ、さうざうしけれ。」（朱雀帝から朧月夜への愚痴。須磨、一九〇頁）。「今まで皇子「みこ」たちのおはせぬ（冷泉帝の）嘆き」（真木柱、三八九頁）。3 参考「初めて皇子が生まれて」帝（冷泉院）は、まして限りなくめづらしと、この今宮をば思ひきこえたまへり。（竹河、九八頁）。4 参考「昔も今も、もの念じしてのどかなる人こそ、幸ひは見はてたまふなれ。」（浮舟、一一三頁）。しのびねの内侍も、宮中を出たり「四十②13」出家したり「四十七10」せず、帝の言い寄りに耐えたから「幸ひ」を得た。「内裏に住む知人の縁で、母尼とも流浪の身を落ち着けたヒロインだが、結果的に、男君との関係をみずから断ち切った形となり、ここに「はかなげな女君の悲恋」の物語は、完璧に条件を整え終わった。従来の物語の系譜を辿るとき、女君の末路はおおよそ想像ができたはずだが―。（中略）『浅茅が露』物語のヒロイン尚侍、『木幡の時雨』物語の北の政所、『あきぎり』物語の中宮、『石清水物語』の女御、『風につれなき』物語の女院、『むぐら』物語の中宮など、ともあれ後半生に世俗的な幸せが巡り来て、「後に幸せを掴む女君の物語」に変貌する描かれ方は注目されよう。」（『中世王朝物語全集』解題、一五九・一六〇頁）。

やがて、<sup>忍音上ラセ</sup>承香殿「しょうきやうでん」の女御<sup>1</sup>と聞こゆ。若宮は二つにて東宮「とうぐう」に居「ゐ」させ給へば、女御、后「きさき」に立ち給ひぬ。中納言の御妹「いもうと」、桐壺<sup>4</sup>の御方「かた」こそ、御身の勢ひといひ、上の御覚え<sup>5</sup>並び無かりしかば、『若宮も出「い」で給はば、疑ひ無き后「きさき」にこそ立ち給はんずる』と、世の人<sup>6</sup>も思ひ、我「われ」も覚え<sup>7</sup>つるに、『覚えぬ人、にはかに出「い」できて、かく押<sup>9</sup>されぬる事』と、口惜<sup>10</sup>しく思しわびたり。

1 しのびねの内侍の地位は若宮の誕生により確立し、女御になり確定。参考「(桐壺更衣は)はじめよりおしなべての上宮仕「うへみやづかへ」したまふべき際「きは」にはあらざりき。おぼえいとやむごとなく、上衆「じゃうず」めかしけれど、わりなくまつはさせたまふあまりに(中略)おのづから軽き方にも見えしを、この皇子「みこ」生まれたまひて後は、いと心ことに思ほしおきてたれば」(桐壺、九五頁)。しのびねの内侍も、両親とも宮家出身で高貴であり「十二②」、父親が亡く、帝が昼も夜も離さない、という点で桐壺更衣と同じ。2 源氏物語における立場の年齢は、朱雀院が七歳、冷泉院が四歳、今上帝が三歳、今上帝の第一皇子、六歳。3 『源氏物語』中において、明石一族がその栄華を不動のものとするのは、明石姫君が男御子を出産したことによる。そして、その御子が東宮となることも、その後も多くの御子が生まれたことも、すべてしのびね姫君の物語と共通する要素なのである。つまり、しのびね姫君の栄華は、明石姫君の栄華を忠実になぞるものであったのだ。」(藤井由紀子氏『しのびね物語』における人物の属性)、「詞林」25所収、平成十一年四月)。4 「東宮の女御、桐壺」「11」が、東宮を産んだ女御か、

東宮に嫁いだ女御か、從來不明であったが、この問題を加藤昌嘉氏は、「帝」と呼ぶところの人物は、物語の始発に於いては、まだ「春宮」であった」と解釈して、解決された（前掲論文）。5「ただ今、桐壺の御方、並びなくて時めき給へば」「十三①7」。「また並ぶ人なかりしか」「七十18」。6参考「疑ひなきまうけの君（東宮）」（桐壺、九四頁）。「疑ひなき御位（皇太后）」（紅葉賀、四一九頁）。7頭注「おほえつるに 按「おほし」の誤成へし」。

8参考「（内大臣の娘、弘徽殿女御は）思はぬ人（秋好中宮）に押されぬ宿世になん、世は思ひの外「ほか」なるものと思ひはべりぬる。」（少女、二九頁）。9以前はもし左大将の娘が入内しても、桐壺の女御に「押し消たれ給はむ」「十三①8」であったのに、今や立場が逆転。参考「故院（桐壺院）の御時に、太后（弘徽殿女御）の、坊のはじめの女御にて、いきまき給ひしかど、むげの末に参り給へりし入道の宮（藤壺）に、しばしは押され給ひにきかし。」（若菜上、三五頁）。「中宮（明石中宮）のいよいよ並びなくのみなりまさり給ふ御けはひに押されて、皆人「みなひと」無徳「むとく」にもおし給ふ」（竹河、五五頁）。10後宮で最も勢力があった桐壺の女御は惨敗。「桐壺女御への寵愛の衰退は内大臣の女主人公への〈いじめ〉に対する〈報復〉に匹敵しよう。とすれば、ここに継子譚の構造が内包されていると考えるべきだろう。」（大倉比呂志氏、『しのびね』論）。源氏物語では、冷泉院の後宮で初めて男御子を生んだ玉鬘の大君は、弘徽殿女御などから嫌われる（竹河、九八頁）。

## 七十五

まことや、大殿「中納言ノ若君おほいどの」の若君は七つになり給へば、殿上「てんじゃう」せさせ奉り給ふ。上、御覧じて、『中納言に、よく似たりけるかな』。美しき香りの愛敬「あいぎやう」は、中宮にも通ひ給へるに、いとほしく思ひて、<sup>10</sup>明け暮れ御側「そば」に置かせおはします。

1 後宮の寵愛争いは前章で決着がつき、「まことや」からは若君に話題が変わる。 2 「七つになり給へかし。内へ参らせて、中納言と思はん。」〔六十五4〕。 3 「大人しくも成り侍らば、殿上せさせて」〔中納言の遺言。六十12〕。 4 「(若君は)宰相の幼かりしに違はぬこそ、らうたけれ。」〔十八③1〕。 5 参考「(六歳の冷泉院は)御齒の少し朽ちて、口の中「うち」黒みて、笑「ゑ」み給へる、香り美しきは、女にて見たてまつらまほしう清らなり。」(賢木、一〇八頁)。 6 「愛敬」は本作品に六例あり、きんつねと桐壺、しのびねと若君の四人のみ。 7 「美しき目見「まみ」のほど、母君によく似給へり。」〔五十八18〕。 8 頭注「給へるに 按「に」は「よと」ゝなど、ありしにや」。 9 「しのびね姫君の血によって初めて帝の特別の寵愛を得ることができたのであった。」(藤井由紀子氏、前掲論文)。 10 「上、しのびねの内侍、御側に置かせ給ひて」〔七十一3〕、「昼は日暮らし、籠りおはします、暮るれば御使ひの暇なき」〔七十二7〕のように、母子とも寵愛を受ける。

## 七十六

中宮は御覧するたびごとに、ただ、ありし人<sup>1</sup>に違「たが」はぬを、あはれに思しめして、ある時、上の渡らせ給はぬ暇<sup>2</sup>「ひま」に、御側「そば」へ<sup>3</sup>寄<sup>4</sup>び寄<sup>5</sup>せ給ひて、「我をば覚え給はぬか」と問ひ給へば、うちうつぶきておはします。「父君の御事は覚ゆるか」とのたまへば、「それは、ほのかに覚え侍る」とて、涙ぐみ給ひて、やがてこぼれ出「い」でぬべければ、紛<sup>7</sup>「まぎ」らはし給へば、いとど催「もよほ」されて、中宮も泣かせ給ふ。「我も、様<sup>10</sup>「さま」をも変へてあらまほしけれども、心<sup>11</sup>にまかせず。また御事の心苦しさに、心<sup>13</sup>ならぬ住まひにて過ぐすとよ。今、ちと<sup>14</sup>も大人しく成り給はば、山籠<sup>16</sup>「やまごも」りの人をも尋ねて、行く方「へ」をも聞き給へ」と、細々<sup>17</sup>「こまごま」と語<sup>18</sup>り給へば、いよいよさめざめと泣き<sup>19</sup>給へり。いはけなかりし時、情「なさけ」なく引き放「はな」ち給ひしこと

思し出「い」でて、ただ今の心地のみせられ給ふ。大<sup>中納言ノ父上</sup>殿「おほいどの」のことは、中宮もことに、うたてく思しめせども、若<sup>19</sup>君のことを思せば、知ら<sup>20</sup>ず顔にて過ぐし給ふ。

1 「中納言に、よく似たりける」「七十五4」。源氏物語でも、桐壺更衣と藤壺、光源氏と冷泉帝、柏木と薫、宇治の大君・中君と浮舟など、似ていることが重要なテーマである。2 帝に遠慮して、または帝に聞かれてはまずいこと「本章13」を話すから。3 単刀直入に手短に尋ねたのは、帝がいつ来るか、またどのように切り出せばよいか分からないから。4 母と別れたのは、五年前、満一歳一ヵ月の時「十八」。その年齢で覚えている方が不思議。5 中宮が実母であることを祖父母などから聞いて知っているが、帝に遠慮して、我が子と名乗れず。しかし「うつぶき」により、中宮は事情を察知した。以前の中宮がよく帝にしていた「うちうつぶきて」「六十八39」を、今度は実子にされるとは皮肉。6 父の出家は、三年前、満二歳半の時。7 参考「(六歳の冷泉院は母藤壺に対して)涙の落つれば、恥づかしと思して、さすがに背きたまへる」(賢木、一〇八頁)。8 参考「(若君が)泣き給へば、(祖父母は)いとど涙催されて」「六十五3」。9 中宮も貰い泣きして、わだかまりも消え、初めて母子の心が通じ合う。涙が和解の象徴、に関しては「三十三30」参照。10 出家は願望に留まらず、実行しようとした「四十七8」。11 「自らの心に任せては、いつか限りあるべき。」「六十八7」。「限りある御命の、心にまかせぬ事の恨めしくて」「四十七21」。「女は身を心に任せぬもの」「五十六①9」。12 若君の将来を配慮するのは、中納言の遺命「六十一13」。13 「心よりほかの住まひは、日に添へて心憂く」「四十四⑤39」。14 「ちとも」の箇所、筑波大学本は「すこし」。「ちと」は中世語か。「三⑥14」。15 この中宮の要望が叶うのは、五年後「七十八」。16 「山籠りの中納言」「六十六冒頭」。17 最初の質問は短かったが「本章3」、打ち解けてからは今まで言いたかったことを綿々と吐露。18 底本では、初めて母に声をかけられた若君が泣いたが、「語り給へば」以下、筑波大学本は「語り給ひて、さめざめと泣かせ給へ

り。」で、泣いたのは感極まった中宮。 19 若君の童殿上は祖父が世話「五十六①15、六十12、六十五5」。元服後の出世にも、祖父の後押しが必要。 20 「内大臣の女主人公への〈いじめ〉」に対する〈報復〉「七十四10の注」は完遂されず。若君は中宮と入道を結ぶ橋渡しであると同時に、中宮と内大臣家の緩衝地帯という重要な役割を担うことになる。「六十五6」参照。

## 七十七

<sup>1</sup>うち続き、<sup>中宮ノ御腹ニ</sup>宮たち生まれ給へり。若君、九つにて元服して侍従になり給ふ。<sup>2</sup>十一にて少将と聞こゆ。春宮の御腹、<sup>5</sup>一の兄にておはしませば、帝もいみじく、かしづき給ふ。日に添へて中宮は、<sup>6</sup>並び無き御おぼえなれば、「ただこの御果報」<sup>7</sup>「くわほう」に引かされて、さる世のわづらひも出「い」で来「き」、中納言も失「う」せ給ふにこそ」と、世の人も聞こゆ。

1 藤井由紀子氏の論文「七十四3」参照。 2 源氏物語における元服の年齢は、冷泉院が十一歳、光源氏と夕霧が十二歳、今上帝が十三歳、薫は十四歳。 3 薫も元服した年の二月に侍従になり、その年の秋、右近中将に昇進。 4 「この物語の冒頭、中納言（岩坪注、時に二十三歳）は四位の少将であった。その少将に若君は十一歳で昇進した。帝の寵の深さを物語る。」（広島平安文学研究会の注）。帝が若君を最眞にすること（「七十五10」。「帝もいみじく、かしづき給ふ」「本章5の後」）は、父中納言の思惑通り「五十一10の前」。 5 底本「一の」は、「ひとつの」（同腹の、の意味）とも「一」「いち」の」（第一の、長兄の）とも読める。参考「一の皇子の女御」（第一皇子の母女御、の意。桐壺、九五頁）。 6 以前は桐壺の女御が、「上の御覚え並び無かりし」「七十四5」。これも中納言の予想通り「五十



一16」。7「御幸ひのめでたきこと限りなし」「七十三4」。「姫君の果報も、中将殿の真の道に入給ふも、皆これ観音の御利生なり。」（新大系『しぐれ』の巻末文）。8「かかる御宿世にてこそ、心憂きことも殿の思しよりけめ。」「四十五10」。「(光源氏が)横さまにいみじき目を見、(須磨・明石に)漂ひしも、この人ひとり(明石の女御)のためこそありけれ。」(若菜上、一二二頁)。

## 七十八

少将は、十二の御年「とし」、中将になり給ひにしぞかし。ただ明け暮れ、『父のおはすらむ所、知らさせ給へ』と、神仏に祈り給ひし徴「しるし」にや、「横川」<sup>4</sup>「よかは」<sup>中納言</sup>におはします」といふこと聞き給ひて、推「お」し<sup>5</sup>当てにおはしたり。「もし、京の人の籠「こも」り給へる所は」と、ここかしこ尋ね歩「あり」き給へば、ある庵室「あんじち」に苔生「む」して、ことにあはれなる所ぞありける。立ち寄りて聞き給へば、法花経「ほけきやう」をいと尊「たふと」く誦「じゅ」して、念仏「ねんぶつ」十遍ばかり申す声のしける。あやしく覚えて、「しかじかの人」と尋ね給へば、中納言入道、聞き給ひて、「いづくより誰「たれ」」と問ひ給へば、<sup>中將ノ從者詞</sup>「大殿「おほいどの」の御孫、中将殿の、御山籠「やまごも」りの人を尋ね給へる」と申しければ、年頃「としごろ」、人伝「ひとづて」には事故「ことゆゑ」なくておはすと聞き給へども、御覽ぜぬ事は心もとなく思し渡りつるに、かつは恋しくも思ふ人の事なれば、『<sup>15</sup>忍ぶべきにもあらず』と思して、「こなたへ」とのたまへば、入「い」り給ふ。

1「十二の御年」の箇所、筑波大学本は「ほどなく」。2少将(正五位下)になった「七十七」翌年、早くも中将(従四位下)。父きんつねも帝の恩寵で出世したが「二十九1の注」、それでも少将から中将に昇進したのは二十四歳

のとき「九4」。父親以上に出世が早いのは、東宮と同腹だから「七十七5」。3 捜し回らず神仏にすぎるのは、父親と同じ「三十五③10」。「特定の神仏名を記さないのは、この種の物語にはむしろ珍しいのではないか。」(広島平安文学研究会の注)。

4 「横川といふ所」「五十九①3」参照。5 米田真理子氏は、「直接逢うことの不可能な二人に代わり第三者が代行する方法は、『長恨歌』に見られる。『しのびね物語』のこの父母の間を往還する若君の存在は、玄宗が楊貴妃の死後にその行方を探させた方士になぞらえることができ、さらに発見に至るプロセスにおいても共通点を見出せると考える。」として、若君が父の居所を人から「聞き給ひて」の箇所は、『長恨歌』の一節「忽聞海上有仙山」に該当するとされた(同氏、前掲論文)。

6 住人も「ことにあはれる」人。嵯峨野の住居も、「いとよしある小柴垣」「二①2」。冒頭で男主人公が姫君を見出すのと、この場面と首尾照応。大倉比呂志氏の説「七十22」が、ここにも当てはまる。参考「大方は家居「いへる」にこそ、ことざまは推し量らるれ。」(『徒然草』十段)。

7 王朝人が最も信仰した經典。8 「尊く」読誦するのも、修行の一つ。参考「この尼君の子なる大徳の、声尊くて経うち読みたるに、(夕顔を亡くした源氏は)涙の残りなく思さる。」(夕顔、一二五二頁)。

9 住居にも読経の声にも風情が感じられ、住人は貴人らしい。参考「けはひ卑しく言葉たみて、こちなげにももの馴れたる(僧侶は薫の君には)、いとものしくて」(橋姫、一二六頁)。

10 頭注「しかくの人と 按、人の下「は」もし有へし」。

11 「山籠りの人」「七十六16」。

12 出家して八年半の間、都とは音信を断って修行していたのではない。たとえば源氏物語で横川の僧都は、女一の宮の祈祷に召され、明石の中宮の御前で話をしている(手習の巻)。横川にも、都の消息は伝わっていた。

13 八年あまり修行を積んでも、我が子への愛情が断ち切れていない。依然として、「(剃髪の折)若君のこと思し出づるに、心弱く、ただ落ちに涙の降り落つれば」「五十九④20」のまま。

14 「心ばかりは行ひ給へども、なほありし面影の、ともすれば恋しく、おぼし忘るる世なく」「六十六1」。

15 弟に会わない浮舟(夢浮橋の巻)や、高野山まで訪ねてきた石童丸に父と名乗らぬ苅萱道心(説経浄瑠璃『かるかや』)にくらべると、この中納言入道は

意志が弱い。これは本作品のテーマや主眼が宗教ではなく、あくまで王朝物語の雰囲気漂わせた叙情性にあるから。

## 七十九

①秋のことなるに、紅葉「もみぢ」いろいろ織り散らしたる御直衣「なほし」、鮮「あざ」やかなるを着給ひて、指貫「さしぬき」の稜「そば」高く取りて、匂ひ入り給へる様「さま」を見出「いだ」し給ふに、夢の心地ぞする。中将は、まづ、父の御顔のゆかしさに、急ぎ入りて見給へば、二三人ばかりおはするを、御覧じ回す。大人しきほどにて別れ給はんだに、変はり給へる御様「さま」は、ふとしも見分け給ふまじきに、ましてほのかには御面影「おもかげ」、覚え給へども、定「さだ」かには、いかでか知り給ふべき。その中に、目見「まみ」などの気高「けたか」く、色も余「よ」の僧より白くおはするを、御目留「とど」めて見給へば、「これへ、これへ」とのたまへるに、うち畏「かしこ」まり給ひて候「さぶら」ひ給ふ。

1 巻頭で忍音の君を初めて垣間見たのも、紅葉の頃「二①1」。父親との再会と「首尾照応」している（大倉比呂志氏、前掲論文）。 2 普段は組み緒をくるぶしのあたりで結ぶが、ここは歩きやすくするため膝の下で結んだ。たとえば『落窪物語』で男主人公が落窪の君と結婚して三日めの豪雨の夜も、指貫の緒を膝下で結び「足白き盗人」と言われた。 3 「匂ひ」は、「芳香を漂わせつつ」（広島平安文学研究会の訳）とも、「華やかに美しい様子で」（『中世王朝物語全集』の訳）とも訳せる。 4 参考「夢の心地もするかな」（玉鬘一行が十八年ぶりに右近と再会したとき。玉鬘、一〇二頁）。「夢のやうなり」（出家した浮舟が簾越しに小君を見たとき。夢浮橋、三七四頁）。 5 参考「（藤壺が落飾して）かたちの異ざまにて、うたてげに変わりて」（賢木、一〇七頁）。 6 「ほのかに覚え侍る」（七十六6）。

7 参考「(宇治の八の宮は)いとあてに心苦しきさまして」(橋姫、一二六頁)。「脇息の上に経を置きて、いと悩ましげに読みるたる尼君、ただ人と見えぬ。四十余ばかりにて、いと白うあてに、瘦せたれど」(若紫、二八〇頁)。8 参考「(光源氏の)御手つき、黒き御数珠「ずず」に映えたまへる」(須磨、一九三頁)。「(鬚黒大將は)色黒く鬚がちに見えて、いと心づきなし。」(真木柱、二八四頁)。米田真理子氏は、『長恨歌』で方士が多くの子の仙子の中から楊貴妃を捜し当てる一節、「雪膚花貌参差是」と比較して、両作品は「複数名の中から、格別に色が白く美しい人物を捜し当てる」という点で極めて近いと言えよう。」と指摘された(前掲論文)。

②<sup>山納言ノ詞</sup>「年ごろゆかしくも恋しうも、御事「こと」を思ふ故「ゆゑ」に、念仏も障「さは」りがちなりつるを、嬉しくも訪ね給へるかな。別れ奉りし折には、『子<sup>3</sup>ほど、持つまじきものなし。遠く入る山道の絆「ほだし」』とも思ひしに、今かく見奉れば、子<sup>5</sup>ならざらん人は、誰「たれ」か草深き山里へ、訪ね入り給ふべき」とて、墨染めの御袖<sup>6</sup>を顔に押しあてて泣き給ふ。中將も直衣「なほし」の袖<sup>8</sup>、引きも放たせ給はず、ややためらひて、「無<sup>中將詞</sup>下「むげ」に幼<sup>9</sup>くて離れ奉りしかば、定かならねども、ほのかに覚ゆる御面影の明け暮れは恋<sup>11</sup>しく、『いかで変はれる御姿をも見奉らん』と、神仏に念じ奉りしに、夢<sup>13</sup>の様「やう」に何「なに」となく人の申し侍りしを、もしやと訪ね参りしなり。ここにおはしましけるを、凡夫「ぼんぶ」の慣らひの悲しさは、今まで知り奉らで、十年<sup>15</sup>あまりが間「あひだ」、ものを思ひ侍りつることの悲しさよ」とて、塞「せ」きもあへ給はず。

1 「恋しくも思ふ」「七十八14」。2 「いかなる野の末にても御事(忍音の君)の忘れがたさに、念仏も障りあるべきと思ふこそ、かねてより心憂けれ。」「四十五26」。「女君の御面影、身に添ひて、念仏も心汚く紛るるぞ悲しき。」「五十九②14」。3 「若君の、いかに尋ね給はん」と思ふのみぞ悲しき。」「五十一18」。4 「よしなき山路(筑波

大学本は「入る山道」のほだし」「四十一17」。 5 参考「中將も、『親ならでは、かやうに誰やの人か、習はぬ徒步「かち」裸足「はだし」にておはしますべきぞ」と、かたじけなくこそ思ひ給ふ。」（室町時代物語大成『狭衣の中將』九〇頁）。 6 泣き顔を見られないよう、我が子にも気を遣った、品のよい泣き方。参考「（帝が忍音の君の）乱れかかりたる髪をかきのけ給へば、衣の袖を顔に押しあてて、忍びがたげに泣く」「四十四②10」。「（阿波の内侍が）袖を顔に押しあてて、忍びあへぬさま、（法皇は）目もあてられず。」（大系『平家物語』灌頂卷、四三三頁）。 7 米田真理子氏は、「しのびねの姫君の泣く姿は、人に見頭わされ、白し」（岩坪注「二十三②1」「三十三21」「三十九①15」「五十六②9」と判断される点に特徴が認められる」ことを踏まえて、「しのびねの姫君がもたらした微笑（岩坪注「七十二4」とは対照的に、出家したきんつねは、やつれた美しい白い顔（岩坪注「本章①8」と結びついた泣く姿を、他の人に見られる側へと移行する。」と論じられた（前掲論文）。「七十二4」参照。 8 参考「（葵の上を亡くした父大臣は）いと堪へがたげに思して、御袖も引き放ち給はず」（葵、五五頁）。 9 父との別れは八年前、四歳（満二歳半）のとき「五十八」。 10 「ほのかには御面影「おもかげ」、覚え給へども」「本章①6」。 11 父を思い出ただけで、人前でも泣きだすほど恋しい「七十六7」。 12 「神仏に祈り給ひし徴「しるし」にや」「七十八3」。 13 「夢のやうに」は、二通りに解釈できる。「横川におはします」「七十八4」という噂の内容が、夢のように漠然としていると理解すると、「はつきりせぬながらも」（中世王朝物語全集）と訳せる。一方、父の居場所を聞いたことが、まるで夢や奇跡のようだと解すると、「人伝ての噂を耳にした時は夢のようで」（広島平安文学研究会）と訳せる。 14 「押し当てにおはしたり」「七十八5」。「もしやと訪ね参りしなり。ここにおはしましけるを」は、筑波大学本（第一系統）と同じ。第二系統は、「やがて標「しるべ」にて侍れば、誠におはしましけり。」 15 実際は八年半。若君か作者の勘違い、または概算、あるいは古本「しのびね物語」では十余年か。もしくは「十二の御年」「七十八1」の箇所、第一系統は「ほどなく」で、この間に数年が過ぎたか。「父についての記憶が極めて薄いので、生まれてこ

のかたという意味で言ったものか。」（広島平安文学研究会の注）。ちなみに『苔の衣』も、出家して二十四年と、ある人が話しているが（中世王朝物語全集、二七四頁）、実際は十一年。

③聖<sup>1</sup>「ひじり」はつくづくと守「まぼ」り給ふに、『我<sup>2</sup>「わ」が若盛「わかざかり」は、あまりにやせ細り、なよびてありしに、これは少しものものしく、丈<sup>5</sup>「たけ」立ちもそろろかに、ほどほどとして美しきものから、まみなどのうち薫り、口の辺「あた」りのうち匂ひたる愛敬「あいぎやう」、母君<sup>8</sup>にいとよく似給へり』。帝の御事など問ひ給ふ。承香殿<sup>忍音上</sup>「しょうきやうでん」は、ただ今の后「きさい」の宮にて、若宮、春宮と聞こゆ。大人「おとな」しやかにおはします」など、ただ大方「おほかた」に語り申し給へば、『さすがに逃<sup>12</sup>「のが」れがたかりける御宿世「すくせ」かな。これ故「ゆゑ」、我が身はかく、いたづらに成りぬるぞ』と思せば、思ひ捨てにし心も驚かされて、胸の騒ぐにぞ、憂き世の綱はいまだ離れざりける。今年<sup>17</sup>は三十五になり給ふ。いと若く美しうおはせし名残りに、やつれ給へども、人に紛<sup>20</sup>「まぎ」るべくも見え給はず。

1 修行に熱心でなく悟りも開けていないので「七十八<sup>13</sup> 14<sup>14</sup> 15<sup>15</sup>」聖とは言い難いが、ここは横川の僧侶として敬意を払って賞した。なお同室の僧も「聖達」「本章④2」と称する。「五十九①5」参照。2 聖が出家したのは八年前の二十七歳、息子は現在、十二歳。聖は十二歳のときの自分と、今の息子を比較しているが、十二歳で「少しものものしく、丈立ちもそろろか」（すこし太って背も高い）という表現は奇妙。古本「しのびね物語」では、父子の再会は息子が二十歳前後の時か。「十年あまり」「本章②15」の注、参照。3 参考「（光源氏は）言はむ方なき盛りの御容貌「かたち」なり。いたうそびやぎ給へりしが、少しなりあふ程になり給ひにける御姿など、かくてこそ、ものものしかりけれ」（松風、四〇六頁）。4 参考「（朱雀帝は）若うおはしますうちにも、御心なよびたる方に過ぎて、強

きところおはしまさぬなるべし。」(賢木、九六頁)。「螢の宮は」あまりいたくなよびよしめくほどに、重き方おかれて、少し軽びたるおぼえや進みにたらむ。」(若菜上、一九頁)。「(柏木は)少し弱きところつきて、なよび過ぎたりしけぞかし。」(柏木、三一六頁)。「(匂宮は)少しなよびやはらぎて、すいたる方に引かれたまへり。」(匂宮、二二頁)。

5 参考「(内大臣は)丈立ちそぞろかにもやし給ふに、太さもあひて、いと宿徳に」(行幸、二九六頁)。「(二十七歳の夕霧は)直衣姿いと鮮やかにて、丈立ちもののものしう、そぞろかにぞ見え給ひける。」(柏木、三二九頁)。

6 「美しき目見「まみ」のほど、母君によく似給へり。」「五十八」。

7 「美しき香りの愛敬は、中宮にも通ひ給へる」「七十五」。

8 「うちうなづきておはする(若君の)顔の、ただ恋しと思ふ人(忍音の君)に違ふ所もなければ「四十一」16」。

9 米田真理子氏は、中納言入道が帝のことを子の中將に尋ねる様子は、『長恨歌伝』の楊貴妃が、「揖方士、問皇帝安否、次問「天宝十四年已遷事」と、玄宗の様子を尋ねることに似通う。」と指摘し、また『長恨歌伝』のこの箇所利用は、『源氏物語』桐壺の巻の鞍負の命婦が方士に擬せられることに先駆が見られ、『しのびね物語』の若君を方士に見立てるとき、この場面を、その延長上に位置づけることも可能であろう。」と説かれた(前掲論文)。

10 頭注「きこゆ 按「きこえて」と有へし」。

11 実母への恋慕を押さえ、私情をはさまず、后として取り上げる。「七十六」5 参照。

12 参考「逃れがたかりける御宿世」(藤壺の懷妊。若紫、三〇七頁)。「逃れぬ御宿世」(柏木と女三の宮の密会。若菜下、二二七頁)。「逃れざりける御宿世」(匂宮と浮舟の逢瀬。浮舟、一一八頁)。

13 「ただこの御果報に引かされて、さる世のわづらひも出「い」で来「き」、中納言も失「う」せ給ふにこそ。」「七十七」という世人の考えと同じ。

14 出家したことを「いたづらに成りぬ」と考えるのは、悟りを開いていない証拠。「いかなりし昔の契りにて、身もいたづらに成りぬるならん。」「五十六②16」。参考「(宇治の八の宮は)なほ世に恨み残りける」(橋姫、一二二頁)。

15 「憂き世の綱」という一節は「人つなぐうき世の中のつなやなに恋にまどはる心なりけり」(『拾玉集』日吉百首和歌・恋・四六八)や「朝夕に袖にかくして結ぶ手のうき世のつなをとかざ

らめやは「『拾玉集』日吉百首・二〇七七」という慈円の和歌に見いだせるのみであり、管見では慈円以外に用いられた例はみあたらない。」(中村友美氏、前掲論文)。  
16 頭注「はなれさりける 按この下「とおほさる」などの詞のおちたるにや」。  
17 「中納言の年齢が明確に記されるのは、本物語中でこれが唯一である。」(広島平安文学研究会の注)。光源氏も三十五歳のとき、玉鬘と初めて対面する。玉鬘も「まみ」などが、母夕顔に「いとよくおぼえて」いるし、光源氏の次のセリフも本章の内容に似る。「年ごろ御行方「ゆくへ」を知らで、心にかけてぬ隙「ひま」なく嘆きはべるを、かうて見たてまつるにつけても、夢の心地して、過ぎにし方のことども取り添へ、忍びがたきに、えなむ、聞こえられざりける。」(玉鬘、一二四頁)。以上の指摘は、中原香苗氏による。  
18 「見るままに愛敬づき、美しきことの並びなき」[四十四①13]。「いつもより華やかにひき繕ひ給へるを、殿・母上は美しと思したり。」「五十七1」。  
19 「やつれ」は出家姿に、痩せ細るの意味を掛ける。  
20 「その中に、目見「まみ」などの気高「けたか」く、色も余「よ」の僧より白くおはする」[本章①7]。

④ いろいろに、山風<sup>1</sup>「やまかせ」防ぎ給ふべき物ども奉り給ふ。さらぬ聖「ひじり」達にも皆、賜「た」び渡しなどして、中将は帰<sup>中將詞</sup>り給ふ。「かく見置き奉れば、今よりは、折々「をりをり」参りて見奉らむ<sup>中將ノ祖父</sup>。殿・北の方、聞こしめしなば、いかに不思議がらせ給ふべき」など申し給ひ、出「い」でもやり給はず、立ち返り立ち返り見給へば、香「かう」の煙「けぶり」に沈<sup>5</sup>み給へる御様「さま」の、悲しくも哀れにも思さる。<sup>入道詞</sup>「この世の栄花「えいぐわ」に誇りて、後「のち」の世の闇、忘れ給ふな。いと夢のやうなる世の中に侍るぞ」とて、御目押「お」しのごひ給ふ。中将の御後ろ影を御覧じ送りて、ありし暁「あかつき」、慕ひ給ひて泣き給ひしこと、ただ今のやうに覚え給ふ。<sup>10</sup>

1 参考「冬籠る山風防ぎつべき綿衣「わたぎぬ」」(椎本、一九六頁)。  
2 参考「明けぬれば(薫は宇治から)帰り



たまはんとて、昨夜「よべ」後「おく」れて持て参れる絹綿などやうの物、阿闍梨に贈らせたまふ。尼君にも賜ふ。法師ばら、尼君の下衆「げす」どもの料にとて、布などいふ物をさへ召して賜ぶ。」（宿木、四五〇頁）。「六一」の注、参照。 3 「不思議」（常識では考えられない、という意味）に思うのは、親子の再会は神仏のお蔭だから「本章②12」。「夢のやうに」「本章②13」参照。「いかに不思議がらせ給ふべき」の箇所、筑波大学本は「われをうらやましく思ひきこえ給はん」。 4 「立ち返り立ち返り見給へば」の箇所、筑波大学本は「身は」。 5 「沈み」は、煙に身が隠れると、心が沈むを掛ける。本作品において「沈む」は全部で十例あり、この一例以外はすべて忍音の君で、その最後は「七十二2」。「しのびね」（「七十二4」の注）のほか、「沈み」も女主人公から男主人公へ交替。 6 「悲しくも」の箇所、筑波大学本（第一系統）は同じ、第二・三系統は「うらやましくも」。後者の場合、中將はまだ十二歳だが遁世に憧れていることになる。 7 「後の世の闇をば晴るけ奉らん。」「六十8」。母君に書き残した事と同じ事を、息子にも言い残す。 8 「夢・幻の世の中に」「六十10」。 9 出家前に若君を最後に見たのは「あかつきに夜深く起き」たときだが「五十八2」、そのとき若君は泣いていない。古本「しのびね物語」には泣く描写があったか。加藤昌嘉氏はこの一節を、「ただ姫君の慕ひ給ひし面影」「五十九①19」と同じ時、すなわち忍音の君との最後の逢瀬（慕ひ給へば）「五十六①23の後」、「泣き給へば」「同31」と解釈された（前掲論文）。 10 「忍音の君を垣間見たことが」ただ今の心地して恋しきこと限りなし。」「六十七6」。

## 八十

さて、内<sup>中將</sup>へ参り給へば、折節、御前<sup>1</sup>「まへ」の前裁「せんざい」御覧じ出「い」だして、あはれなりし事をも思<sup>2</sup>「おぼ」しめし出「い」でたるにや、御袖<sup>3</sup>しほたれ給へるに、中將、近く参り給ひて、<sup>中將詞</sup>「いと、あはれなる事こそ侍りつ

れ。かの御山籠<sup>6</sup>「ごも」り、尋ね奉りて、対面給はりぬ」と申し給へば、<sup>中宮ノ詞</sup>「いと珍かなることかな。いづくに、いかにして」とのたまへば、<sup>中將詞</sup>「横川「よかは」に、おはしましつる。墨染めの袖にやつれて、香<sup>9</sup>「かう」の薫「かを」り深く、寂<sup>10</sup>しき御ありさま身に添ひて、悲<sup>11</sup>しくこそ」とて泣き給へば、中宮も、今さら御心乱れて、いよいよ御涙ぞこぼれける。

1 参考「御前「おまへ」の壺前裁の、いとおもしろき盛りなるを（桐壺帝は）御覧ずるやうにて」（桐壺、一〇九頁）。  
2 参考「昼つかた、御まへにまかりて、見まゐらすれば、上もおはしまさで、しめじめと静かなるに、過ぎにしかたの事を思しめしいでたるにや、御袖もうちしをれつつ、ながめ臥したまへる」（『あきぎり』）。中原香苗氏の指摘。  
3 「心ならずうち笑ひ」（七十二・4）で、「しのびね」（忍び泣き）は無くなったように見えたが、実はまだ涙から解放されていない。  
4 他の人に聞かれぬよう、小声で話すため近づく。中宮も中納言入道の話をするときは、「上の渡らせ給はぬ暇」（七十六・2）を狙った。帝には内緒の秘密を共有することが、この母子の連帯感を深める。  
5 参考「（靱負命婦は帝に）あはれなりつること、忍びやかに奏す。」（桐壺、一〇九頁）。「（右近は）山踏「やまぶみ」しはべりて、あはれなる人（玉鬘）をなむ見たまへつけたりし。」（玉鬘、一二二頁）。  
6 「山籠りの人をも尋ねて」（七十六・16）。  
7 気が動転して、「いづくに」「いかに」と疑問詞を畳み掛けるのが精一杯。  
8 「やつれ給へども」（七十九・3）参照。  
9 「香の煙に沈み」（七十九・4・5）。  
10 修行に打ち込めず悟りを開いていないので「七十九②」2、「寂しき御ありさま」に見える。  
11 「悲しくも哀れにも思さる。」（七十九・4・6）。  
12 「中將が中納言と会ったということを中宮に語るが、中宮の反応を描く筆は意外にあっさりしている。物語の大尾に向けて筆を急いでいると見るべきか、それとも心の乱れを大げさに外に表わさなくなった中宮の成長した姿を描いたものと解すべきだろうか。」「姫君の中納言に対する思いが最後まで語り尽くされていない憾みがあり、それがこの物語の文学作品としての

限界を示しているというべきであろうか。」(広島平安文学研究会の注)。

## 八十一

さて、その後「のち」、二位<sup>中將</sup>の中納言に成り給ふ。春宮も、八ばかりにおはしませば、いよいよ美<sup>3</sup>しう氣高「けたか」くて、御心も大人<sup>4</sup>しく、世<sup>5</sup>を保ち給ふとも、いかに疑ひあるまじう見えさせおはします。

1 二十六歳で中納言になった父親「二十九」より、はるかに出世が早い。「七十七4、七十八2」参照。ちなみに源氏物語で中納言になった年齢は、夕霧が十八歳、薫が二十三歳。2 若君と五歳違いの東宮が、本章で「八ばかり」ということは、若君は十三歳。「七十八」〜「八十」では十二歳だったので、本章は「八十」の翌年になる。3 加藤昌嘉氏は、『しのびね物語』は、きんつね・しのびねの姫君・若君という親子を、「うつくし」「けたかし」と顕揚してまない。因みに、三者は、「ひかる」「かゝやく」とも賞揚されるが、その一方、帝が「うつくし」「けたかし」「ひかる」「かゝやく」と称されることは、ただの一度もない」こと、および「うつくし」「けたかし」を同時に有するのは、きんつねと春宮の二者のみである」に注目して、「春宮を、きんつねの隠された子」と推論された。しかしながら同氏が指摘された通り、春宮の誕生は、きんつねと姫君の最後の密会「五十六」から丸二年後であり、きんつねは春宮の実父ではない。そこで、「物語は、実に周到に一年の冷却期間を置き、しのびねの姫君の産んだ子が、帝の真の皇子であることを、あえて殊更に、理詰めで訴えていると見るべきかも知れない。」と説かれた(前掲論文)。

4 参考「宮(六歳の冷泉院)はいみじう美しう大人びたまひて」(賢木、一〇七頁)。「春宮(冷泉院)の御元服のことあり。十一になりたまへど、ほどより大きに大人しう清らにて」(落標、二七一頁)。

5 参考「(十歳の冷泉院は)

御才もこよなくまさらせたまひて、世を保たせたまはむに憚りあるまじく、賢く見えさせたまふ。」(明石、二六四頁)。「<sup>帝</sup>春宮も、世を保たせ給はんに何のあやふきところかあらん。さるべき御後見「うしろみ」どもは、これかれあまたものし給ふ。今は国を譲り給ひなん」とて、にはかに帝おりるさせ給ふに」(中世王朝物語全集『白露』二五九頁。中原香苗氏の指摘)。

## 八十二

明くる春は、帝、御位「くらゐ」去らせ給ひて、春宮「とうぐう」、<sup>1</sup>位につき給ふ。かの中宮は女院<sup>2</sup>「にようゐん」とぞ言はれ給へる。中納言殿も、右の大臣殿「おほいどの」の中の君に通ひ給ひて、父中納言殿に引き替へて、立ち退「の」くことなく、思ふ様「さま」にて過ごし給ふ。当代「たうだい」の帝は、御元服「げんぶく」ありけり。<sup>5</sup>いっしか左大将の姫君、女御に参り給ひぬ。中納言殿は、かの山籠<sup>7</sup>「やまごも」りをも絶えず訪れ給ひて、さるべき折々は渡りて、見奉り給へりとぞ。

1 源氏物語における即位の年齢は、朱雀帝が二十四歳、冷泉帝が十一歳、今上帝が二十歳。 2 「風葉集によれば、古本の姫君は尚侍であったが、現存本では中宮を経て女院となっている。また、男君は(入道)中將から入道中納言に、帝は退位して院にと、それぞれ発展している。この古本と現存本との差異は、改作の問題を考える上で重要である。」(広島平安文学研究会の注)。 3 「右のおほいとの」の箇所、筑波大学本は「大きおほいとの」(太政大臣家の意味)。 4 十四歳で結婚。二十五歳で左大将の娘と結婚した父入道より、結婚も出世も早い。ちなみに光源氏は十二歳、夕霧は十八歳、薫は二十六歳、冷泉帝は十一歳、今上帝は十三歳で結婚。 5 源氏物語では、冷泉帝は元服・

即位して半年後に最初の入内。今上帝は立坊・元服後、すぐ麗景殿、二ヵ月後に桐壺が入内。 6 出家した男主人公（きんつね）の北の方も左大将の姫君で、その妹か。しかし、きんつねの結婚から十二年も立ち、また「ただ今、世の固めとなるべき下形「したかた」「十三②2」と言われた左大将が、十二年間も昇進しないとは考えにくいので、別人であろう。 7 「かの御山籠り」「八十6」。「出家した中納言は、息子との交渉を続けたという形で締めくくられていて、高德の僧としての大成が語られるでもなく、男主人公の扱いとしては若干の不満が残る。」（広島平安文学研究会の注）。しかしながら苧萱道心のように修行に徹するのではなく「七十八15」、家族愛と仏道の間に揺れ動く優柔不断な姿の方が、中庸を重んじた王朝人らしく、平安物語の流れを汲むとも言えよう。たとえば「（執心が残らぬよう、姫君たちが父宮の亡骸と対面することさえ禁じた）阿闍梨のあまりさかしき聖心「ひじりごころ」を（姫君たちは）憎くつらしとなむ思しける。」（椎本、一八一頁）のように、きんつねも我が子にさえ会わないほど仏法一筋になつては、読者から嫌われ、王朝物語の主人公ではなくなる。 8 「さるべき折々は」の箇所、筑波大学本は「さるべき物などつかはして、折々は」。後者の場合、物資の援助を「七十九④1」以後も継続 9 「今よりは折々、参りて見奉らむ。」「七十九④2の後」は、口先だけの社交儀礼ではなく、実行している。